

[研究報告] 1996年9月

山の手文化の研究
—山の手キーワード集—

財団法人ハイライフ研究所

山の手文化研究会 95年度 研究報告書

■ 序	岩渕 潤子	3
■ 研究レポート		
「山の手家族生活」	松岡 温彦	7
「山の手住宅史めぐって」	水野 統夫	23
「公人としての山の手精神のバックボーン」	米村 洋一	45
■ 活動レポート		
	伊藤 恵	59
	犬飼 素子	61
	岩野 裕一	63
	鈴木 伸子	65
■ 山の手 キーワード集		67
■ 95年度 活動報告		95

序

岩 淵 潤 子

本年度の『山の手文化／ホームコンサート』研究会の活動は、振り返ってみると、前年度に比べてホームコンサートの実践数が少なく、かわりに識者からのヒアリング、山の手文化についての文献収集と読解など、地道な作業中心の一年となった。

昨年に引き続き、松岡温彦、水野統夫、米村洋一の三氏より提出された基調論文を一読すれば明らかなことだが、当研究の狙いは、現在の私たちが日常の、たとえば不動産広告などで見聞きする「山の手風のすてきな暮らし」という、後代の人間によってつくられ、演出された消費レベルにおける「山の手」のイメージと、戦前の質実剛健、リベラリズムと新しい文化の担い手として数々の重責を果たしてきた「ホンモノの山の手」との違いを明確にすることから、現代日本文化の不毛に対する建設的な提案を行うことにある。ことに私たちは、「ホンモノの山の手」と第二次世界大戦との関係、山の手イメージがなぜ戦後ゆがめられてしまったのかについて、日本の近代化という観点から子細に分析し、長くプラスの評価を与えられることのなかった「山の手」の文化に、現代にふさわしい新たな価値を見いだそうとするものである。

本年度は、ヒアリング活動を通じ、また、途中、岩淵潤子が雑誌『東京人』と共同で行った取材などを通じ、少なくとも私たちは粉飾されていない戦前の山の手姿を、そこに実際に暮らした方たちの力をお借りして、うかがい知ることができた。また、新たに「山の手キーワード集」をスタートさせたことによって、日頃私たちが何気なく使っている言葉、物などの山の手ルーツを辿る作業も進んでいる。今後はヒアリング活動をさらに継続すると同時に、今までに収集された資料の分析作業に入り、最終年度に向けて、なぜ山の手のリベラリズムは第二次世界大戦の軍国主義のうねりに飲み込まれてしまったのか、そして、なぜ戦後の日本は文化に疎い国家になってしまったのかについて、その責任の所在も含め、議論を集約させていきたいと考えている。

一方、ホームコンサート活動については、研究会の各メンバーが必要な手順にも慣れた

ので、必ずしも研究会主催の演奏会でなくても、各々自発的な発想・活動が活発だったようである。昨年のコンサート活動を通じて体得した有料コンサートは、必ず何等かのチャリティ目的にするという活動方針は、戦前の山の手精神にも通ずるもので、メンバーの間で自発的にこうした考えが出てきたことは喜ばしい。本年はまた、メンバーのピアニスト、伊藤恵氏が初めて北米でホームコンサートを行うことができたことも、評価されるべきことではないだろうか。最終年度は、あくまでも山の手文化の研究と分析が主体となろうが、ホームコンサート活動も適当な機会があれば継続したいと考えている。

研究レポート

山の手の家族生活

松岡温彦

既に議論されてきているように山の手の定義や範囲について明確なものはないし、また研究の過程で、同じ山の手といいながら内容はかなり違い、その多様性も一つの特長ではないかと思われるほどである。そこで、「ある山の手の家族の生活」とせざるを得ないが、幾つかの特長的事とは提起できるであろう。われわれの研究の立場は単に山の手の過去を調べて記述するのではない。そこにかもしだされていた、新しい豊かな生活への希望を改めて確認し、これからのわれわれの生活に胸の熱くなるような息吹を吹き込もうとするものである。

封建社会からの脱出、家父長制崩壊の兆し

山の手で育った人達の何人かに聞くと、「夜は必ず父と食事をした」と言う。これは現在から見ると際だって良い特長のように見えるが、当時の山の手の生活のなかでは、むしろ封建制の名残であったといえるであろう。当時の子供達はその時点では夕方の食事に間に合うように帰宅を義務づけられていたことは、一つの束縛と感じていたはずである。父親を中心に家族がまとまっていたことは、家業が忙しく勤め人でもなければ夜家族そろって食べることが当たり前には出来ない下町との違いでもあった。山の手に住み着いた人々は地方から出てきて中央官庁などに勤めた士族階級が多かったわけだから、そのライフスタイルが受け継がれていたことは確かである。しかし、時代が移り明治から大正、昭和初期にかけて地方から上京して山の手に住む人々も、政治的な背景が薄れ、中央へ出て活躍したいために、当時の基準で優秀な人材として、主に教育のルートや軍人養成のルートを通してやってきた。こうした人々には地方の閉鎖性を嫌い、家族の濃密なシガラミから逃

れたいとする気持が強かった。やがて彼等が家族をもって、父親としての権威を振りかざすことはあっても、それは既に自分が田舎に捨ててきたものであることに気がつくのである。勿論農家の次三男で東京に出てきたものは、山の手と下町の間やその外側に次々に住み着くわけだが、彼等とて田舎でコミュニティの成員に監視されているわけでもなく、都会の精々近所付き合いの程度で父権は次第に風化せざるを得なかった。

このように、封建社会の遺制として家父長制を捉えるならば、山の手的生活の中では、父の大きな存在はむしろ面白くないものと考えられる。われわれが現時点でノスタルジックに憧れをもって見ているものかなりのものがこのように、われわれの先代が葬りさろうとして悪戦苦闘してきたものなのであろう。

山の手家族の朝

昭和初期のある山の手家族の風景から、父の権威の崩壊過程を見てみよう。父は地方士族の家柄で、良く勉強して東京帝大を卒業、官吏。母は実業家の娘で山の手屋敷に3代続けて暮らしている。当時の典型的な組み合わせである。

山の手勤め人の家庭では、「女中さん」が6時には起きて朝御飯の用意をしていた。次に祖母や母といった女性達が起きて祖父、父が次に起きる順番で、最後に子供達で、早くから目はさめているのだが、小さいときは着替えを「女中さん」が来て手伝ってくれるまで、ばたばたと騒いでいる。だが、起きる順番が変わることがあるのが山の手が最初だったのではないだろうか。つまり、母が父より早く起きないことである。地方士族の育ちであれば信じられないようなことらしく、父にとっては不満の種になる。母にしてみれば「女中さん」がいて、朝の準備をしていて、必要があれば不自由することはないのだから自分が先に起きる必然を感じていない。母方の親が先代あるいは、先先代からの山の手育ちであれば、娘の嫁教育の中に、旦那様より先に起きなければならないと言う事項は無くなっている。しかし、父にしてみれば、こうした形での父権の一角の崩れは不快なもので、何れ来る父の権威の揺らぎを予感させる不吉なものがあったであろう。

それでも、朝御飯は全員揃って食べ、終わるまで父より先に食卓を離れることは許され

ず、これはよく守られていた。それから父が出掛ける用意をするのだが、それを母が手伝うか、「女中さん」になるかが、第2の分岐点になる。父は当然母が手伝うことを期待している。ところが、母の方は気が向けばやるが、子供が食卓に付けるような歳になると、朝御飯で遊ぶ子供達から目が離れない。父が自分の部屋に着替えにいくのも忘れて子供をかまっている。場合によっては祖母などと今日の外出の予定などについて話し込んでいる。「旦那様がでかけられます。」と声が掛かって、ようやく腰を上げて玄関に行って見送る。見送り、出迎えはさすがにきちんとやっている。勿論、食卓につく時は、祖母にしても、母にしても、きちんとした格好はしていた。家も広かったせいもあるが、「女中さん」はじめ家の中には、何かと他人が出入りしていた。物売りも家にやってくるし、家のまわりを手入れする大工、植木屋、庭師のような男衆を絶えず見かける。彼等はすぐに庭から入ってきて声をかけるので、自分の部屋以外ではきちんとした見なりが必要だったこともある。父は勤め人であったから、朝出掛けてしまうと、こうした外からやってくる人達に会って必要なことを決めるのは、結局父ではなく母や祖母の役割になる。毎日見ていると、采配を振っているのは、この2人が中心になる。ものを買うにしても、庭をいじるにしてもお金がからむものなのだが、父親に相談することもない。大きいことは、後で報告しているだけである。

山の手勤め人

父が出掛けると、「女中さん」達は後片付けと掃除に午前中を使う。掃除は毎日する大仕事だった。これを指揮するのがまた母の役であった。子供達の目には、日中一緒にいる母の権威は偉大に映るので問題は無いが、父親の判断する場面、決断する場面を見るのが無いので、父の存在は希薄なのである。山の手家族の中での父親は、家にいる時間の長さによって左右されている。また、社会的地位の高さにもよる。勿論、現在のサラリーマン中心の大衆社会とは違い、階級社会であり、明治から昭和初期の山の手住人は上層の階級に属する人達が多かったので、官庁や大手の企業に勤めるといっても、現在のサラリーマンとは違い、時間的なゆとりがあり、社会的な地位も高く、現在にはないが、近所

の人達にも尊敬されているのが普通だった。普通の毎日は、6時前には帰宅し、家族と夕食を共にするのが習慣になっていた。夜遅くなることは特別のことで、緊急の事態が発生するとか、偉い人に呼ばれて夕食が出るという宴席の場合などで、そんなときは、何となく家中に緊張感がただよった。当時の勤め人は責任感が強かった。それは階級社会であるから特権もあったが、そのかわり責任は重かったからでもある。現在と違い自覚度合いも強かったようである。今でも、キャリア、ノンキャリア、「特権さん」という言葉が残っているが、当時は、この言葉の意味が、上級国家公務員試験をとって入省しているかどうかという区別ではなく、責任のとれる人、とる人の意味であった。戦後、公務員は人々に奉仕する公僕などといった言葉のせい、役人に当時の責任に対する颯爽とした緊張感がなくなった。大衆社会での役人が責任のとり方を見失うのは、サービスと感謝の社会的価値が確認されない未熟な社会だからである。

一家揃っての夕食と食後の団らん

夕食は、当時の日本の食事の中でウエイトが高く、御馳走が出る機会であり、社会人類学でいう「ハレ」で、そこの主人公が父であった。勤め人の父の最後の砦は、この夕食にあったのであろう。そこで、家族は必ず同席することが義務づけられていた。一方、子供達にとっては、次第に面白くなる友達との遊びや、そのころから長くなってきた都会の夜の楽しみを前に、夕食に必ず戻ることは大きな障害に感じられるのであった。朝、出かける前の父親に向かって、夜の外出の許可を求めることは、苦痛以外の何物でも無かった。そこで、母親が子供の味方をして、子供の夜間の外出を許すような家庭から、父親の権威は次第に失われていくのである。子供、あるいは母親と父親の外出許可をめぐる議論あるいは口論の中で「自由」という言葉が頻繁に出てくるようになる。別項で検討するが、山の手族の間に吹き荒れる欧化ムードの中で「自由」は錦の御旗のように響いて、これに反対すると「お父様は封建的だから。」という言葉が必ず誘発するのであった。「自由」と裏腹に「規律」があることが一般に紹介されたのは、ケンブリッジ大学で学んだ池田潔が岩波新書から出した、その名も「自由と規律」が売れた時であった。それでも、名門三井

の御曹子の池田の本は極く一部の人達に理解されたに過ぎず、多くの人は、戦後のかなわぬ夢の「海外留学もの」として表面的にしか読むことが出来なかった。戦後50年を過ぎた今日でさえ「自由」と「規律」の関係を理解する人は少なく、民主主義の基礎が築かれな
いままである。封建的だとされた父親が若さに溢れた反抗盛りの娘に「自由と規律」を教
えることができたなら、あるいは、戦争さえ回避できたかも知れない。やがて「自由」と
いう言葉を口にするだけで危険思想の持ち主として警察のつけ狙らう時代がやって来るか
らである。

外食

場合によっては、夕食を家族揃って外で食べることもあったが、それは、一大事で、妻
も子供も大喜びで晴れ着を来たり、支度に時間をかけるのであった。それも、思い付いた
ように出掛けるのではなく、かなり前に予定されていて、指折数えて待つのである。外食
は、女中さんはじめ多くの人達の毎日の作業に影響をあたえるので、おいそれと、気の向
くままに出掛けられるものでもなかった。しかも行くところは決まっています、洋食のレス
トランであった。山の手出身の60代を越えた人達には、今でも洋食が好きだと言って、コ
ロケやビーフ・シチュー等の美味しい店に通う人がいるが、大抵、親に連れていって
もらった回数が多い人である。なかには、付け合わせに必ずといってよいほど出たという、
やわらかくてトマトケチャップにまみれたスパゲッティを懐しがる人もいる。父親のリー
ダーシップの行方はこの外食でも発揮された。やはり、率先して外食に連れていく父親は
権威を維持することが出来たようだし、母親や子供に、やいのやいの言われてしぶしぶ連
れて行き、料理の選択も出来ないことになる、父親の存在感を失うことになる。

普通の日には夕食後父は書斎に入り寝るときまで出てこない。役人でもあれば、この時間
かなり勉強するのであった。経営者の家などは夜のお客の出入りが多い家もあった。子供
たちの「夜遊び」は厳しく制限されていたから、夜の食事の後しばらくの時間が一家団ら
んで、この時間にピアノが弾かれたり、歌が歌われたり、本が読まれたりした。勿論その
日のトピックスが披露され、あれやこれやと笑ったり、怒ったりがあるのだが、お茶を入

れたり、お菓子をもってきたりする女中さんが話しに加わったりするのもこの時間である。場合によっては祖母が「〇〇さん、こっちに来て、あの話しをしてちょうだい、可笑しくて皆笑いが止らなかったわよね。」などと、女中さんを話しの中に引っ張り込むこともよくあった。この夜の団らんの場に出てきて話しに加わったり、積極的に自分の好きなレコードをかけて解説するような父親は権威とは別のニュアンスで開明派とか、進歩的な男と見られて親しまれることになる。つまり、書齋に引っ込んでしまうのも、一緒に騒ぐのもあまり望ましいことではなく、最も評価されたのは、皆と一緒に居ながら、口数も少なく、必要なときに相づちを打ち存在感を示す父親が模範的であった。そして、頃合を見計らって「そろそろ休んだらどうだ。明日があるから。」とタイミング良く皆を促し、それから書齋に行くのであった。これは、家族の皆の気持をうまく察知し、その日一日の状況を読み、翌日の皆の予定を頭にいれておく必要があった。皆が立ち上がる切掛けを間違えて、早すぎれば、もっと話したいことがあったのにと不満が残り、遅すぎれば、だらだらと聞きたくなはなしを聞かされてと、不満が出るので実際は毎日のことで当たり前のように「家長」の権威を維持することは容易なことではなく、それこそ制度と自然環境にきつく守られていた地方の「家長」とは違い、山の手の自由な雰囲気の中での「家長」は個人の實力によるところが大きかった。

山の手女性の午後

お使い

一方、朝「家長」を送り出した後は掃除の指示をする祖母や母や伯母といった家の中に残る女性軍については述べたが、洗濯は和服の洗い張りとか特別なものは、経験の長い祖母が指示をしたりしていた。買い物についても指示を出しているうちもあれば、女中に任せているうちもあった。たいていは御用聞きが来るので、夕飯の材料などはそれで間に合うので、お客を呼ぶ場合は前以て頼んでおいて、鯛などの高級魚をもってきてもらうようにしていた。御用聞きに来る商人は魚屋だろうが、八百屋だろうが、こちらの家庭の事情

に大変詳しくて、気を聞かせて状況に相応しいものを届けるのが当たり前であった。大抵はお祝い事であるとか、孫が来ているとかを女中から聞いていて材料を見繕ってくる。それに店に良いものが入ると、今日は鯖の生きのいいのが入ったと担いできて、それは当然のように買うことになるので、夕食のおかずは必然的に決まることも多いようだった。家族族のものが食事の材料を買いに行くことは、「お使い」として子供達が肉屋などに行くようなことはあったが、それは教育的意味以上のものではなかった。普通「お使い」は買い物にしろ、よそのお宅に何かを持っていくにしろ女中さんの仕事であった。地方から珍しいものが届いたといえば、近所や親戚にお裾分けしようとするのが常であった。その場合に単にものを届けるだけではなく、挨拶やら、消息の伝達があり、まさに物流と情報交換の機会であった。その家の主婦や娘がお使いに出る場合には、今もお中元のテレビコマーシャルに出てくるように、きれいな和服を着て日傘をさし、丁寧に風呂敷に包んだ品物を腕に抱えて出かけるのであった。子どもが親戚の家へお使いにやられるような場合は手紙を持たされたり、事づてを頼まれる事が多く、また返事を聞いてくるように言われた。電話があるにはあるが、どういう訳か手紙を利用することが多く、誰もが素早く手紙をしたためる。こちらが誰がお使いに行くかによって先方に出てくる人も違って、家族のものが行けば、必ず奥の方から、その家の主婦が出て丁寧に應對する。子どもが行くと、時には応接間に通され、緊張して足をぶらぶらさせていると、それこそ、余り見られないガラスのカップに紅茶が出され、カステラなどがついてくる。お使いの行きは気が重いが帰りは心も軽く、戻って家中の人たちに報告するのが嬉しかった。ただ、お使いから戻ると祖母や母に根ほり葉ほり、行く道ではどうだったのとか、先方でどんな話が出たのかとか聞かれるのが大変だった。「お使い」はどうやら子ども達の教育という意味があったらしく、その時は割合大人扱いされたような気になった。場合によっては、車に乗せられて行けば運転手は子どもに対しても家を代表する者という扱いで、普段とは違った緊張感が漂うのであった。しかし、子どものお使いという場合も決定するのは家にいる女性軍であり、現役で外で働いている祖父や父の出る幕はない。また、祖父が隠居しているような場合でも、そのような事に口を出す事は決してなかった。こうしたことでも女性側の影響力は増加する一方であった。ただ、幼稚園の決定権は母方で、特に男の子の場合には小学校以上の学

校の選択については男の権限が強かった。

外出

家に残っている女性達の午後は外出に当てられることが多かった。午前中の家事が終わって、「よそ行き」に着替えてお出かけとなる。行き先は様々で、友達の家を訪問する事も多かった。現在のように町中でお茶を飲ませるような所は少なかったこともあり、お互いの家を訪問しあうのが普通で、その結果、家族同士のつき合いが自然に生まれていた。友達とえば、家中の誰もが知っているのが普通で、その友達の家族をめぐる話題が夜の団らんの時に良く出るのであった。逆に言えばこうした共通の話題があるからこそ、一家が集まって話し合うことが出来たのである。芝居を見に行くのも大きな楽しみで、歌舞伎座、新橋演舞場など、出し物が変われば必ず行くのであった。なにしろ、楽しみはごく限られていて、しかもいける人は限られているので、これも共通の話題になりやすいものであった。当時の流行は、劇場での出会いで云々されていたので、現在の欧米の社交界に似たようなものであった。デパートやホテルもどちらかと言えば社交の場の趣があった。デパートも買い物そのものは、外商が自宅にやってきて「お誂え」と書かれた包みを置いていくなどしていた。その頃のデパートの主力商品はやはり衣類であったから、今のような出来合いのものを着ることがなかった状況の中で、しかも着物が普通の着るものであったわけでデパートの中で処理することも難しかったのであろう。ホテルの利用は今に比べてかなり多かったように思われる。これは、先程の自宅を訪問し合うという状況と同じで、安心して集まれる場所が少なかったせいでもある。これも、面白いことに現在の西欧で上流階級によって利用されるホテルのイメージに近い。ホテルというハードも、使い方というソフトも輸入されたままの使い方がされていた時代の話である。また、山の手に住んでいた海外経験のある日本人は、滞在期間が長く、ホテル利用については生活レベルで体感したものを身につけて戻ってきていた。

ボランティア

他に様々な集まりがあった。特にキリスト教関係の活動に参加する事が多かった。教会そのものは日曜日の礼拝を別として週日には婦人会や聖書購読があった他、今で言うボランティア活動が活発に行われた。このボランティア活動の対象は貧しい人達や、病気の人達であったが、その頃は貧富の差が大きく、特に貧しい人達は毎日の食事にも事欠く状態であった。教会は、そうした恵まれない人達を救う社会的機能を持ち、公共団体が十分にできない福祉事業の最前線にたっていた。病院でもキリスト教系の病院は聖ロカ（聖路加）病院を始めとして貧しい人のために特別に便宜をはかって治療に勤めたのである。病院の経営から考えると今では無理な事業を寄付や、ボランティアの協力で切り抜けていたのである。山の手の女性達は、ボランティア活動等を通じて社会の現状を見せ付けられ、福祉社会を夢見たり、その中での女性の地位向上に強い意欲を持ち始めた。この問題も時々、夕食後の団らんの話題に出たが、男達は真面目に取り合うことはなく、いつも話だけに終わってしまうのであった。そこで言われる「男女平等」などは、男はもちろん女性達でさえ、全く現実感はなく、山の手以外では口の端にも登らないわだいであった。しかも重要なことは、山の手の女性は常に支配階級としての立場であり、非支配階級への哀れみが動機となって熱心なボランティア活動に邁進していたことである。当時の支配階級は前にも述べたように社会に対して責任感をもっていたのである。人々は、この点を通り一遍に解釈して、「山の手」のお嬢さん育ちの気まぐれと言い、揚げ句の果てに大衆のスケープゴートとして山の手不人気を煽ったのである。ところが、彼女達は、少なくとも社会性をもっていたということを忘れてはならない。現在多くの人々は「男女雇用均等法」などの制度整備が進んでいる一方で、その前提となる、社会的役割の認識を持つことが出来なまま過ごしている。それは、戦後、政府だとか、大企業だとかを支配階級に見立てて被害者になりすまし、社会的な役割を放棄している男性のだらしなさに巻き込まれて、ただ悪戯に子供の進学にうつつを抜かして来た多くの女性が持っていないものを持っていたということなのである。「第四山の手の奥様」などというが、それは、あくまでマーケティングによって名付けられたもので、実際の山の手の女性とは全く類似点がない。

女中さん

この時代、何と言っても大きかったのは、午後の祖母や母の外出中、子供の面倒を女中さん達がみてくれていたことだろう。生まれたてはともかく、乳母がいればなおのこと、そうでなくても母乳でいつまでも育てるのは良くない、早く乳離れをさせることが「進んだ育児」のお手本であった。子供を早く自立させようとするのは家族中のコンセンサスがあった。下町では、子供は労働力と考えられていた時代で、山の手でも「手伝い」は子供の自立のための教育過程の一つであった。家も大きかったから、子供は揺りかごに入れられて担当の女中さんが注意している。泣いてもだき癖はご法度で抱くことは許されなかった。病気でなければ泣くだけ泣いて、自分の我がままが通らないことを納得して自分で遊ぶことが出来るようにさせられる。幼稚園や小学校になれば、さらにこの傾向は強くなり、母親と話すより女中さんとのコミュニケーションが多いということになる。幼稚園に最初につれていくのも女中さんであったし、父親はもちろん母親でも幼稚園や学校に行くことは滅多になかった。幼稚園や学校の方も引受た以上、自分達の教育方針で責任を持つという姿勢だった。

数少ない、幼稚園や私立学校は教育方針は明確で、山の手親には知れ渡っていたので、その教育方針に共鳴して入れた親がとやかく言う筈もなかったが、教育の分担は明快だった。家庭生活に必要なものは親が教え、社会生活に必要なものは幼稚園や学校で教える。その上で、知識教育があった。

山の手育ちの、とくに男性は女中さんの思い出が多いのはこうした環境のせいである。「かわいい子には旅」とか、「獅子は千尋の谷へ子供を突き落とす」といった教訓は繰り返し言われ、少しでも甘えるようなことがあると厳しくたしなめられる。このように自立に向かって仕付けられ、一人でいることに慣れ、母親の方は女中さんにまかせて余り心配せずに外出するのだった。

さて、午後の外出はこうしたものだったが、言うまでもなく、夕御飯前、それも、夕御飯の支度にかかるころには帰宅して、盛り付けなど準備の最終段階の指示などをする。祖父や父が戻ってくると、先頭にたって出迎え、着替えを手伝う。外出した余韻を全く見せない

い。それは、祖父や、父が「女の外出」を認めないわけではないが、決して喜ばないことを知っているからである。お互いに暗黙の了解のようで、聞きもしなければ、言いもしない。こうした生活が続いて男と女の社会が分れていくのである。

避暑

別荘を開ける

山の手の家族の1日について朝から夜まで、時間を追って述べてきたが、1年を通じてみると、もっとも特長的な生活のは、避暑の習慣であった。毎年7月の半ばを過ぎると、祖母は暑さを気にするようになる。今とは違って、庭も広く、風通しの良い和洋折衷の家で、和室の部分は簾に風鈴で、それこそ女中さんや書生として家にいた学生さんが暇さえあれば打水をしているし、洋館の部分は厚い漆喰の壁で、天井が高く日中でもひんやりしている。多分日永一日中家の中にいれば何とかなるのかも知れないが、例の午後の外出の暑さが応えるのかも知れない。そして、何よりも避暑先で毎年会う友達のことが楽しみなのに違いない。避暑先は人によって違っていたが、毎年同じところへ行くことが当たり前になっていた。箱根、日光、軽井沢は代表的な避暑先で、箱根に行く人は必ず毎年、箱根に行った。滞在先は箱根であれば富士屋ホテルの様な西洋式サービスの完璧なホテルか、別荘であった。ホテルと言っても1ヵ月～2ヵ月は滞在するのだから準備は大変だった。いわんや、別荘の場合は、留守番の者を置いておいても、持ち込む荷物はかなりの量になり、「荷造り」という印象が強く残った。「運送屋さん」が持って行って「チッキ」にする。祖母の場合は軽井沢で、その「チッキ」は駅止めになっている。軽井沢の駅で自分の荷物を確認すると、軽井沢にいる「運送屋さん」が待ち構えていて馬車や牛車にのせる。こうした「運送屋さん」は毎年のことだから名前でも呼んでいた。この人は「亀さん」と呼ばれていた。駅の前店の人が懐かしそうに迎えてくれて、今年の軽井沢はどうのこうの話し掛けてくる。そのころは専用の馬車を駅に迎えによこした人もいたが、ハイヤーやタクシーそれも少なかったのでバスをよく利用した。バスと言っても15分乗って着くとこ

ろが別荘地の範囲で、それ以上は観光の場合の遠出の場所だった。別荘はバスの停留所から歩いて5分以内にあるのが普通だった。軽い荷物を連れてきた女中さんに持ってもらい家につくと留守を預かっているものが出迎え、また、その地区の別荘管理人、大工、水道屋と関係者が待っている。すっかり掃除も出来ていて、挨拶が済むと一休みする。涼しい空気を吸って長旅の疲れを癒す。上野、軽井沢間、5時間の時代で、朝出て軽井沢に着いてしばらくするともう夕方になる。夕方の鳥の音が別世界の感じを与える。それでも、大工さん、水道屋さんと順番に家の保守の状況などを聞き、手を入れるところを決め、いつやるかなど指示する。その間、遅れて荷物が届き、運送屋の「亀さん」が荷ほどきをする。こうして軽井沢到着第1日は暮れるのだが、その後2、3日は荷物の整理や、新聞屋牛乳の配達を頼んだりして、慌ただしく過ごす。東京と違って、使用人が少ないので自然祖母自身が働くことになるのだが、実は、これが楽しくてたまらない様子で、朝早く起きてベランダを竹箒で掃いたりしている。この時期ご近所で別荘を開けられているところは少ないが、大学教授や作家などで来ている人がいて、毎年来ているのに今年はまだだとか、すぐ話題になる。別荘に人が入った気配がすとか、夜になって明かりが灯ると、ああ、今年も見えたな、と嬉しくなる。落ちついたところで祖母が挨拶回りを始めるのだが、近所はせいぜい5、6軒で、後は結構遠くに行かなければならなかったので、毎午後1軒ずつだった。

別荘地でのコミュニティライフ

祖母の交際範囲が広がったのか、別荘に来る人が多かったのか、夏中、人の出入りが多く、午後はたいてい社交だった。殊に軽井沢でもこの辺りは内村鑑三が避暑に来ていたところで、周辺にはキリスト教関係者が多く、交際が多かったこともあったのだろう。そこから東京などの外界との連絡は郵便以外にはない時代で、一度軽井沢に来てしまえば、その中だけが生活の世界だったから、内容のある毎日を送ることが出来たと言える。家の中では祖母が毎年最初にやってきて家を開け、次に孫が夏休みになると待ってましたとばかりに集まって、急に賑やかになる。それから母や叔母が到着する。勤め人の男達は、休みがとれば、3、4日来るのがやっとだった。何しろ、土曜日が休みでもなく、往復に時

間が掛かるので、とても長くは滞在できなかつた。それでも、オーナー経営者や、資産家で働かなくて良い人達と外人は避暑生活を満喫していた。この人達に学者、作家の文化人が混じって軽井沢の独特の雰囲気形成されていった。そうした人々の夫人達の中には男達に囲まれて華やかな日々を送っている人もいたし、教会の婦人会を中心に女性のサークルを作って聖書や名作を読んでいる人達もいて、様々なコミュニティ、ライフが展開されていた。概して女性はこのような雰囲気の中で、教養を育み、特に欧米の民主主義の思想に親しむ機会に恵まれた。

祖母の別荘のお隣の別荘は、外交官で欧米の各国に駐在して退官し大学教授になった人だった。毎日3時過ぎになると必ずお茶を飲む習慣だった。よそで招かれていない日には自分の家でお茶を入れて、人を招くことにしていた。祖母はほとんど出かけているので母や叔母と子ども達が呼ばれていった。お隣の夫人の得意はドーナツでそれもふわふわしていなかった。これが本当のドーナツだという口上があつて皆で頂いた。ある時はイギリスのビスケットであつたり、とにかく外国製のお菓子を用意してあつた。教授も加わつて、以前任地だったところを中心に欧州の話話を披露した。お互いの別荘に呼び合う事が盛んで、夜はブリッジやキャナスタなどカードをして楽しむことも多かつた。東京と違って、別荘地の開放感は格別でホテルで開くパーティなどを別とすればカジュアルな格好で気安く人の家にいけるのが楽しかつた。玄関からおもむろに訪ねるのと違って、庭伝いにテラスでくつろいでいる友人に声をかけることも容易かつた。

欧米思想の風

軽井沢に来ている外国人は教会関係者を別にすると、外交官はもとより、新聞社や企業の駐在員もほとんど家族全員で避暑に来ていた。日本は極東の気候も悪く衛生状態の悪い派遣地で、彼らの待遇は日本でもアフリカや他のアジアにある植民地並の待遇であつた。彼らは軽井沢に来ている期間は思う存分楽しむのであつた。ライシャワー元駐日大使の思い出の記の中にも軽井沢の夏が如何に楽しかつたかが書かれている。

軽井沢の開放的な環境の中で、祖母をはじめとする日本人の女性は、家族が一緒になって楽しむ彼らの様子を見ながら、いやでも彼我の違い考えざるを得なかつた。家族は自由に

父親に意見を言ったりするのは信じられない光景だった。父親が台所で手伝う姿を見るのも珍しい見物だった。なるほど、これが民主主義というものか、家はなんと遅れているのだろう、というのが実感されるのだった。

この避暑の2ヶ月によって、勤め人の男との意識の差がまたまた開くので、秋になって東京に戻ってもしばらくは、何か分からないが堅い雰囲気在家中を支配していた。母が軽井沢ではと話し始めると父は機嫌が悪く、皆父のいるところでは、その話題を避けた。冬になると、葉山に避寒に行くことも決まっていた。しかし、期間も短く、祖母でも2～3週間で、その間に女子供の家族が2～3日行く程度で、家に与える影響も少なかった。葉山はホテルを定宿にしていた。支配人以下ホテルの従業員は常連のお客のことは熟知していて行き届いたサービスで、ゆっくり出来たようだ。ここでも、毎年来る友達と楽しく過ごす毎日だった。

年中行事と山の手の精神

そのほかの年中行事は、お正月から大晦日まで、各節句はもとより旗日などはきちんと祝われた。それに、クリスマス、イースターもあったが、日本のお祝いは家の中で家族全員が参加し、西洋のお祝いは女子供が教会に行き済ませ、家の中では特別なことはしなかった。まだ、季節感があり、日本のお祝いに力があつた。キリスト教でもお彼岸とかお盆も大切だった。これは、女中さん達や地方から出てきている書生や下宿している田舎の親戚といった人達にとって大切な日で、こうした季節の節目が生活のリズムを与え、人使いを容易にしていた。休みを取らせるとか、お小遣いをあげるとか、彼らの日頃の労働に感謝する気持ちを伝える機会になっていた。

結局、家の中を取り仕切るすべてが、勤め人の男達が関与出来ず、祖母、母と女性に引き継がれていき実質的なバランスが女性に向かっていくというのが山の手の家族の特徴だったような気がする。勿論、その程度は家、家によって違っていたが、全体の傾向としては、そのようなものであつた。こうした傾向を支えていたものは山の手の多くの子女が教育を受けたミッション系の学校であつたと思う。カトリック、聖公会、日本キリスト教

団などキリスト教各派が日本女性の教化を目的に次々に学校を設立した。教育によっての上ってきた山の手の男達にとっても、子女の教育に完備された施設と新しい教育は魅力的で宗教的な抵抗に勝るものだった。こうした、ミッション系の女学校、大学を出た女性は意識が高く帝大出の夫に十分対抗できる理論武装がなされ、欧米の思想が勢力を増すに従って力のバランスは女性に傾くことになる。軍国主義が日本中を覆っても底流には根強くこの教育の影響は残るのである。山の手の精神的なものは女性に体化して戦争の時代を生き延びるのである。

山の手の住宅史をめぐって

水野 統夫

1 山の手の住宅の歴史を調べる意味

日本の近代都市住宅の歴史は、そのまま、山の手の住宅史に重なる。というより、日本の近代都市住宅史を振り返ると、山の手の住宅様式の動きが、日本全体に拡がっていく歴史である。このことが、意味しているのは住宅の様式のベースとなる生活意識や生活様式において、山の手のそれが、日本の近代都市生活様式の標準とか、典型となっていくということに他ならない。勿論、伝わっていくに従って、その生活様式の根本となっている精神性のようなものがこぼれ落ちて、抜け殻だけが拡まっていくことが多いが^{*1}、その点を考えると戦後50年かけて、我々は、山の手の生活意識を正当に受け継いでいるだろうか。技術の進歩が産み出した新しさを除くと、戦前の山の手の住宅が獲得した質を、現在我々は手にしているだろうか。国民全てが中流階級と言われる現在、今後のハイライフのあり方を検討するためには、一度、立ち止って振り返ってみる必要があるようだ。そうした視点に立って、戦前の山の手の住宅が確立した生活意識や生活の質のようなものをもう一度調べ直してみることは意義があるのではないだろうか。

2 山の手の生活様式がなぜ日本の都市の標準となっていくか

明治以降、近代日本において、山の手の生活様式がどうしていわば日本の標準、あるいは共通の到達目標となっていくかを考えると、山の手が近代日本において果たした役割が浮かび上がってくる。

〈武士の世界の国際性〉

その原因の第一は、江戸時代から山の手に住んだ武士の世界がもっていた国際性があげられる。江戸の市内は大きく分けると、武家地、寺社地、町地の三種から成り立っており、そのうち、大名・旗本の武家の住居地が全体の60%を占めており、町人の住む下町に対し、山の手と言われていたが、ここでの生活は、我々が現在考える以上に国際性を持っていた。江戸時代の武家社会を律していた最も大きな制度に参勤交代の制度があるが、これにより諸藩の大名とそれに仕える家臣は、在府（江戸暮らし）と在国（郷里暮らし）を繰り返すことになった。こうして「江戸詰」^{*2}や「詰越」として多くの武士が江戸の藩邸で暮らしていたのである^{*3}。これ程大きな人口の移住・交代が江戸を中心に繰り返され、彼等の生活の拠点が山の手にあった結果、山の手武士の文化が諸藩の武士階級の間にも広がっていくことになる。

〈江戸ことば〉

その最大のものが「ことば」である。山の手における武士のことばが、「江戸ことば」として江戸に集まる各藩の武士や出入りの商人等の間で公用語としての性格を帯びていった。彼等は国元で日常的に話す地域語（お国ことば）と、江戸へ行って通じる共用語（江戸ことば）という言語の二重生活をしていた。その結果、文化・文政期（19世紀初め）には、江戸ことばとお国ことばとを比較対照させた江戸会話読本の様なもの（例えば、仙台のお国ことばと江戸ことばを上下に対照させた「方言達用抄」）が全国各地にあらわれるようになっていく^{*4}。当時江戸の武士の人口は、町人と同じ50万人であり、しかもそのうちの何割かは江戸・国元の交流人口で新陳代謝されていたことを考えると、江戸ことばが共通語となって全国に広がったのは当然と言える。さらに幕末の頃には山の手武士社会だけでなく、上層の町人の間にまで浸透しており、明治になって統一国家「日本」となった時、共通語として存在していた江戸ことば（山の手ことば）の存在意義は非常に大きかったと思われる。明治に入って全国から上京してきた多くの人々（その多くは地方士族）は、自藩のお国ことば以外に山の手ことばを共通語として使えたため、言葉の壁に困ることなく、新たな生活をスタートできた。明治国家が形成されていくためにも、外国とその

文化との対応に関しても共通語としての山の手ことばが存在したことの意義は、現在考えるよりもずっと大きかったと思われる。江戸以来の山の手文化が持つ国際性の象徴として存在した山の手ことばが、日本という国家の共通語として存在していたことになる。この結果として、山の手ことばが日本語としての標準語になっていくが、山の手生活様式が地方に広がっていく過程の背景には、この言葉の問題がある。

〈交流のメカニズム〉

さらに、ことばは、コミュニケーションの手段であると同時に、コミュニケーションを通じて思想や文化・風俗等を伝えていく。江戸時代の山の手は、当時の知識階級であった武士が、お国から上府して他国の人々と交流し、教養を高め、情報を交換する場であった。この結果、文化の共有性のようなものが生まれており、それが参勤交代によって地方に広がっていく「メカニズム」ができあがっていたのである。いわば、山の手は、江戸期においても、諸国の人々が交わる国際交流の拠点であり文化や風俗の発信基地であり、結果として日本の統一性（勿論均質化とも言えるが）を育んできたのである。

〈国内国際性〉

そのうえ、江戸期における山の手を中心とするこの国際性（小木新造氏は、これを国内国際社会と呼んでいる^{*3}）は他国者を排除するより同化しようとする住民意識を生んでいる。例えば、B・S・モースは「挙動の礼儀正しさ、他人の感情に就いての思いやり・・・これ等は恵まれた階級の人々ばかりではなく、最も貧しい人々も持っている特質」（「日本その日その日^{*6}」）と感嘆しているように、「排他的でない暖かさ」が、明治になって以降近代日本の形成期に、多くの地方人を受け入れると共に、新しい文化を受け入れ育む土壌となっていく。諸藩が崩壊し、武士団が解散させられた後、多くの士族が上京し、新しい学問や技術を吸収して明治政府の役人・学者・技術者・企業の経営者となって山の手に住む。彼等は、旧藩時代においても江戸（＝山の手）在住の経験があった者も多かったと思われるし、共通語としての山の手ことばが話せたので^{*7}、国において職場（藩）がなくなった時点での選択肢として、上京して新たな生活の方法を求めることは当

然のことであった。彼等にとって山の手の「国内国際社会」は非常に有り難かったと思われる。この排他的でない暖かさは、彼等を受け入れただけでなく、外国からの新しい思想や技術・文化を受け入れるのにも大きく貢献している。この結果、明治5年には57万8千人（朱引地内）にまで減ってしまった東京の人口も、明治22年には東京市内15区（朱引地に対応）で137万8千人と、江戸の人口を越えるまでになっている。この間に、一時茶畑にまでなっていた江戸の山の手が復活し、明治の新しい政治経済体制のなかで中産階級となっていくこれらの人々の生活の場となっていく。

〈中産階級の精神的バックボーン〉

この新しい階級の精神的バックボーンとして受け入れられたのが、明治4年に出版され、数十万部の大ベストセラーになったS・スマイルズの「自助論」（Self Help）を中村正直^{※8}が訳した「西国立志編」である。このなかで強調された「独立心をもて」、「自主的であれ」、「誠実であれ」、「勤勉であれ」、「正直であれ」という徳目は、彼等の生活信条となっていく。明治時代、政治家・官吏・教育者（彼等が山の手の住人である）の汚職はほとんどなかった^{※9}と言われている。彼等は、既存の体制を否定し、新しい生活原理や思想的立場の確立を目指していた。その出身の違いにより、否定したものの中味は薩長による支配体制であったり、徳川幕藩体制による封建的身分制度であったりするが、現状を打破し、新しい立場を確立しようと努力していた人々にとって、新しく入ってきた西欧の文化は、彼等がまさに目指しているそのものであった。教育を治め、技術を習得し、勤勉に努力することによって自律する人間が評価される自由な社会である。このような信条を伝えたアメリカのキリスト教プロテスタントイズムは、英語と共に新しい中産階級に浸透していった。もともと、こうした徳目は、江戸時代の武士道や、大商人の家訓、町人の心学、農民の勤勉、整理整頓に厳しい職人の労働倫理等のように、共鳴する倫理的風土があったことにもより受け入れられ易かったとも考えられる。新渡戸稲造（南部藩）、内村鑑三（高崎藩）、新島襄（上州安中藩、江戸の生まれ）のような武士道的クリスチャンを始め、明治期のプロテスタントはそのほとんどが幕臣や佐幕派の諸藩の出身である^{※10}ことに示される意味は深いものがある。

こうした新しい価値観や文化が、山の手の中産階級を中心に浸透していき、身に付いたものになっていく。特に彼等の子供の世代は、2代目の強さとして、これらの価値感が自然に身に付いており、それによって古い価値を否定し、新しい価値感による文化や生活様式の創造に向かっていった。大正デモクラシー、キリスト教特にプロテスタントの普及、女子の教育と地位の向上、文化学院や京華中学^{*11}等に代表される新しい教育や大正リベラリズムに基づいた文化となって、大正から昭和の初期にかけて花開くことになるが、こうした新しい価値観の影響を受ける形で、生活様式とそれに伴う住宅様式の変化が表われてくる。自我の確立への欲求とプライバシーの尊重、女性の地位の向上と家事の合理化、公衆衛生の普及等と一緒に、家族中心の生活様式を生み出し、それに応じた住宅様式を生み出している^{*12}。

3 山の手の住宅様式の成立

最初に、山の手の住宅様式となる「居間中心住宅」の成立過程として、明治以降近代日本の都市住宅の様式がどのように変化してきたかをたどっていきたい。

〈武家の住居〉

明治2年、東京の土地（朱引内地）の69%を占めていた旧武家地は、参勤交代制の廃止により、住む者がいなくなって荒廃の一途をたどっていた^{*13}。青山周辺などは昼間でも危険と言われるほどであり、このため一時、桑・茶が植えられたりしたが、明治5年以降は地券を発行して払い下げられた。その結果、役人や会社員などの新たに東京に集まった人々が住みだしたが、残された旗本屋敷の利用も含めて^{*14}、彼等の住居は、かつての中・下層の武家の住居がモデルとされた。これらの住宅は、表・中・奥というように書院形式の結合で成り立っていた（規模が小さくなれば、構えは減り形式も崩れていたが）。このため、玄関部分のスペースが大きく、部屋から部屋への動線をとらざるを得ない間取りであり、便所は居住部分から突き出して設けられ、浴室はない例が多く、湯屋に出かけていた^{*15}。当時の山の手の住居をB・S・モースは、「日本のすまい内と外」で、次のように記している。

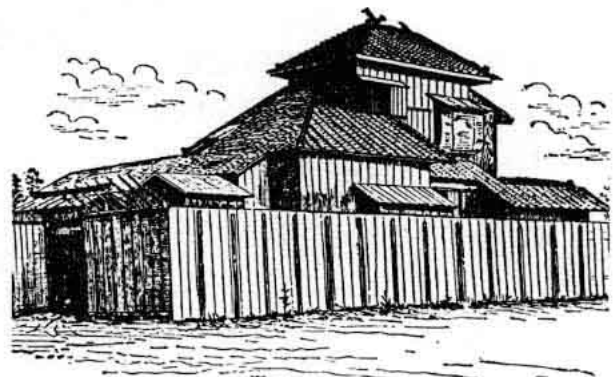
〈日本のすまい内と外〉

(図の建物は) 新開地の道路に面して建てられたものであり、となりは空き地になっている。それでも、周囲をたかい塀でかこっているが、これは、日本の住宅が開放的であるため、プライバシーが必要なときには、たかい塀か、あつい垣根によるしかないからだ。玄関は、門のちかく、(上) 図の左手に見える。建物の正面には、これといった装飾はなく、そのほか、どこにも装飾らしきものはない。いちばんおおきな、最上のヘヤは裏手にある。そこには、裏庭とよばれる庭があり、台所がこの庭に面している。この庭は、家の玄関口にある庭と並行しており、両者のあいだに、たかい塀がたっている。二階に、ヘヤがひとつあり、客室に当てられているようだ。(中略) この住居の裏側のようすが、

(下) 図にえががれている。居室はみな、直接、庭に面しており、縁側にそって、三つのヘヤが一行にならんでいる。二階の縁側には、かるい庇がかかっている。また、日射しをさえぎるために、簾がかかっているが、おなじようなスダレがしたの階にもみえている。

縁側は、たいへんひろびろとしており、かりに、住居を二つの部分にわけることが生じれば、ヘヤのなかの敷居に、襖や板戸をはめて、分割することができる。なお、この図の左手のほうの縁側のはしには、便所がみえる。この家は、したの階がきわめて開放的につくられており、通風がたいへんよい。

こうした状況のなかで、西欧の技術・文化の導入と共に、その建築様式も入ってきて、いわゆる「洋館」として、人々



モースが描いた日本家屋
道路からながめた住宅(上)と庭からながめた
住宅(下) (『日本のすまい内と外』所収)

の畏怖と興味と憧れの対象となり、錦絵等もしばしば描かれることになる。従来の日本の畏怖と興味と憧れの対象となり、錦絵等に建築に較べ、明快な建築的表現を持っており、人々の高い関心を集めたので、必然的に新しいステータスの象徴となった。

(1) 和洋併置式住宅

なかでも住宅の洋風化は、宮家・公家や旧大名等の華族、高級官僚や実業家等の明治のリーダーによって進められた。これが「和洋併置式」の邸宅である。日常の居住の場である和館（和風住宅）の横に、接客空間としての洋館を併置した邸宅である。なお、洋館の住宅としては、この形式の前に、幕末から明治初期にかけて、長崎や、横浜・神戸等の開港地に建てられた外国人達の住宅があり、「コロニアル住宅」と呼ばれてる。長崎のグラバー邸のように、ベランダが周囲に張り出しているもので、日本人のために作られた住宅としての西洋館に、住宅スタイルとしては非常に深く影響を与えている。例えば、日本の近代建築の父であるコンドル設計の邸宅は必ずベランダが付いており、ヨーロッパの西洋館とは建築様式的には違っているが、日本では、ベランダのある方がむしろオーソドックスな形式と受け取られていた^{*16}。

この和洋併置式の住宅は、明治中期以降多くつくられている。純洋風の住宅も一部あったが主流とはならず^{*17}、基本的には和洋併置式の住宅が中心であった。洋館だけでなく和館も残っている現存最古のこの形式の住宅は岩崎久弥邸である。明治29年にコンドルの設計で竣工している。その配置は下図のようにになっている。図の右下南東部に表門があり、左手に庭を見ながらアプローチをたどると、ぐるっと回る形で北入りの玄関部分に到着する。右側に洋館と玉突室があり、左手に和館が中庭を含んで大きく展開している。



岩崎久弥邸配置

裏には発電所があり自家発電をしていたことが分かる。庭は和風の庭を改造して芝生を貼った和洋折衷の庭で温室と茶室や氏神社が共存している。この建物の中でどういう生活が行なわれていたかの聞き取り調査が藤森照信氏によってなされている^{*18}。これによれば、洋館は主人とお客様だけが使っており、家族の日常生活は和館の方で行なわれている。次頁の間取り図に示されているように、玄関も3つに分かれており、洋館の玄関から主人が日常的にも出入りをし、家族は洋館と和館の境界部の玄関から、使用人は更にその奥から出入りするようになっている。

洋館は、日常は主人が書斎として使うだけで、全体を使うのは、外国人を招待するパーティーの時と、自分の家が主催して様々な日本人の客を招待するパーティーの時であり、特に岩崎家本家として一族を呼んでの会食が定例であったとのことである。さらに和館のほうにも接客空間があった。洋館に近い所にある広間がそれで、結婚式・正月の一族の年賀・法事・ひな祭りなど、冠婚葬祭はここで行なわれている。接客などのハレの場として洋館だけでなく、和館の広間が使われており、同じハレの行事でも昔からの行事は広間で行なわれていたことになる。この結果、食事は洋館でし、広間に集まるような場合、その境にスリッパの山ができて大変だったとのこと。この和館もハレの場に使う点が、今まで、洋館は接客空間、和館は日常生活空間と思われていたのとは異なっており、実際の使われ方を聞き取りによって解明した藤森氏の研究成果である。

「和洋併置式」の意義について

この和洋併置式の住宅の意義について、従来定説となっていたのは

- ①洋風建築技術又は設備を大規模に輸入し、我が国住宅洋風化の魁となった
- ②特に生活形の豊富化において住宅史的意味を強く有する
- ③しかしながら、封建時代的住宅観＝生活思想は前進していない

という点である^{*19}。①と②に関してはその通りであり、③に関しても100%否定するつもりはないが、生活様式の表われである住宅の使われ方は一朝一夕に変わるものではなく、

世に謂はゆる貴顕 紳の邸宅なるものは、多く完全なる和洋の二館を備ふ。此故に各館互に固有の美を競ひ粋を網羅して更に遺憾なしとす。即ち寒威凜冽雪降るの日は、温暖春の如き洋館の炉辺に侍し酷熱肌を蕩らかすの夕は、閑雅清素の席上に座して涼風と親しむ。此に至りて住家的人生の快樂も又極まれりと云ふべし。

と述べている^{*20}。さらに、鍵のかかるドアで区切られた個室の良さを知ること、食事を食堂で一緒にすることの楽しさを知ったこと等^{*21}、洋館を併置し、スリッパの山ができてなんとかそれを使いこなそうと努力して獲得した実感は大きく、この時代以降の新しい住宅様式を生み出す原動力になっていったと考えられる。頭の上で理解したことよりも、実際の体験のなかから感覚的に把握したものの方が、実際の生活のうえには大きく影響を与えていくのではないだろうか。歴史を振り返る時、とかくこの面が忘れられがちである。

(2) 中廊下式住宅

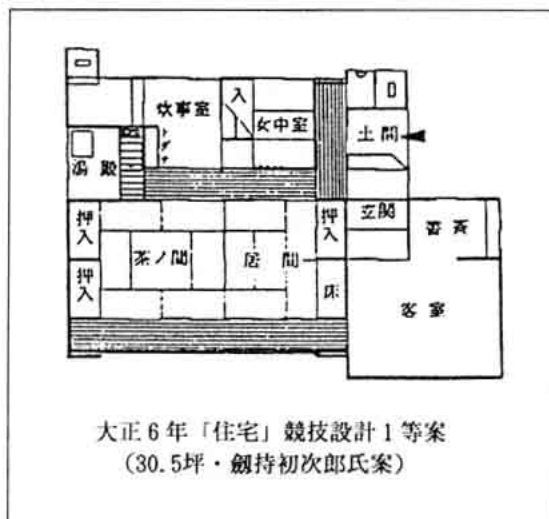
和洋併置式住宅について、明治末年頃から創られるのが、「中廊下式」の住宅である。玄関の脇に洋風の応接間があり、残りは全て和風で、真中に廊下が合って、南側は居間とか座敷など主人達の生活部分があり、北側には書生や女中の部屋、台所、浴室などサービス部門と分かれている形式の住宅である。明治30年代位からの、日本の資本主義の成長・発展により、山の手を中心として都市中産階級が発生するが、彼等の住む中流住宅の需要が起こる。しかも彼等の生活信条や意識を背景にして、規模・形式・設備を含めてこの時代の「ありたき標準（モデル）住宅」としての性格が求められた。この結果、

- ①4・50坪程度以上で100坪以下位の規模の住宅に洋風独立応接室が付加される。
- ②プライバシーが西洋館の経験等を踏まえて意識されるようになり、通り抜けの部屋が嫌われ、その解決策として中廊下が導入される。
- ③中廊下によって、南側に家族の生活部分、北側に水まわりを主とする付帯部分と女中室等が集められる。

- ④台所、洗濯場等の設備が、明治末年から大正期にかけて展開された生活改良の動きと、現実にそれらの設備が手にいれ易くなったこととで改善される。

という形で成立した中廊下形式の典型的なプランを示すと右図のようになるが、これに対し従来は、

- ①極端な接客尊重が改善されておらず、主人中心の住宅である。
- ②中廊下により部屋の通り抜けはなくなったが、寝室等が確立されておらず、プライバシー等の個人生活の確立度が低い。
- ③主婦の地位が低い。女中の存在等により



まだまだ封建的であるという批判的位置づけがなされてきた^{*22}。

にも拘わらず、「洋風応接室の存在は、接客部をこの部屋に縮小・限定することになり、在来主座敷・次の間形式の主居住部は、居間・茶の間ないし寝室・居間等に機能的に転化し、家族の生活部は南面好位置に進出して『家族中心』の住宅観に自ら変化していった」点は評価されていたが^{*23}、実際の使われ方を調べると必ずしも接客部が洋風応接室に限定されていた訳でない。例えば、「この形式の住宅が戦前の企業の課長クラスの一つの理想像であり、『おい、今帰った。〇〇君が一緒だ』と部下を呼んで洋風応接間に入れ、とりあえずお茶を出し、その間、奥では奥様が子どもを寝かそうと思って敷いていた布団をはぎとり、あわてて作った和風のお繕とお酒を出す」「応接間の奥は和風の座敷で、プライベートな空間なんです、そこが和風の客間に早変わりするわけですね」という話^{*24}に示されるように、和室でも接客が行なわれていた。この点からも藤森氏が、中廊下式は明治の和洋併置の大邸宅を小規模化したものにすぎず、例えば、前に示した岩崎邸の独立の洋館を洋風の応接間に縮小し、和館部分の中庭をなくして、南の家族部分と北のサーバント部門を廊下で区切れれば中廊下式ができると指摘し、中廊下式の位置づけを和洋併置式の小型版とする新説を提案されている^{*25}。

中産階級が彼等の生活意識を背景に中流規模の住宅を目指した時に、和洋併置の大邸宅がモデルになったことは容易に想像されるし、冠婚葬祭を始めとする生活慣習の変化はそう簡単に進まない点から考えると、藤森新説は一理あると思う。さらに木村氏の接客部門の評価に関しては、現在の感覚でこれを把えていいものか疑問がある。現在の我々が考える以上に、住宅における接客の需要は多かったものと思われる。この後、家族中心の考え方が広まるのと共に、住宅が郊外に拡がっていった結果、接客の需要そのものが減っていったのではないだろうか。いわゆる第一・第二山の手ぐらいまでは、親類縁者や勤め先の人間関係が住宅に持ち込まれる比率が昭和の初期位までは相当高かった結果、こうした接客尊重の形式になったと思われる。この形式の住宅の問題は接客尊重のことよりも、部屋の機能分化が進んでいない点である。先の対談でも、布団をはぎとって和室を客間に転換したときのいじましが話題になっているが、この機能による部屋の分化がされておらず、その独立性がほとんどない点こそが問題であり、こうした点がはっきりと身体的感覚として理解されてきた結果、次の新しい様式が生まれることになる。

(3) 居間中心住宅

大正3年(1914年)4月、大阪朝日新聞に、パリ在住の河上肇による「鍵付の戸と紙張の障子」が発表される。「西洋人の精神的乃至物質的生活を何かに纏めて掌の上に載せて見せると注文をさるるなら私は鍵を出して示そう」として、西洋に来て人々が多くの鍵を携帯していることに驚くと共に、鍵を西洋の個人主義の象徴として理解し、日本の家屋との違いについて次のように言う。

「鍵を下ろしたる重き戸の代わりに、日本では紙一枚の障子で部屋を囲んでいる。出入自在である。共同主義である。たとひ一軒の家が五間になって居ようと、十間になって居ようと、実は一間の家である。五間六間乃至数十間の室が離るるが如く即くが如くにして、茫然漠然自から一室を成せるものが日本の家である。」

と河上氏は、西洋の場合内部と外部を画するのは「部屋」であるのに対し、日本では「家」がそれに相当すると主張し、「鍵」を中心に、空間の最小単位の差異に言及している^{*25}。

〈住宅改良、生活改善の運動〉

こうした実感による部屋の独立性に対する欲求が生まれてくると平行して、大正時代を中心に昭和の初期にかけ、住宅改良、生活改善の運動が起こり、激しい大波となって展開する。

大正4年 我が国初めての住宅懸賞競技設計（報知新聞主催）、以後数回行なわれる。

大正5年 住宅改良会（あめりか屋の橋口信助が中心となって、武田伍一らの建築家、大隈重信らの政治家、三角錫子らの女子教育家が参加）の発足
機関紙「住宅」の発刊。

大正5年 建築世界社「住宅建築」発刊。

大正5、7年 台所懸賞競技設計。

大正8年 生活改善展覧会開催及び生活改善同盟会（文部省主導で佐野利器東教授、考現学の今和次郎等が参加）発足。

大正8年 「住宅」競技設計で、居間中心形案入選。

大正9年 生活改善同盟会、「住宅改善方針」発表。

大正10年 建築学会大会テーマ「建築と文化生活」。

大正10年 「建築と社会」競技設計、入選案は居間中心形が独占。

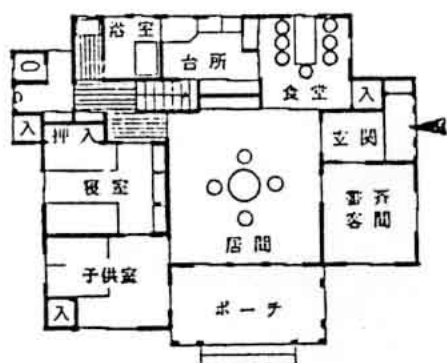
大正11年 東京平和博覧会、住宅展示会開催。

大正11年 大阪桜ヶ丘住宅展示会開催。

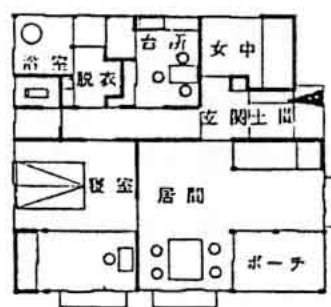
大正11年 消費経済展覧会開催。

こうした一連の動きに示されるように、大正デモクラシー、大正文化主義を背景にした、思想的・倫理的生活改良の流れが、住宅を舞台としてわき起こる。この運動は、女性を含めた一般知識層を中心に、民間団体、教育界及び学会、文部省、マスコミ等を巻き込んで幅広く行なわれたが、住宅改良の目指したものについて藤岡洋保氏は、ひとことで言うとそれは家族重視の洋風生活を導入することであり、具体的には、①椅子座式の採用、②家

族の団欒・プライバシーの重視、③台所の改良であったとしている^{*27}。さらに②について「今では当たり前のことであり、とりたてて言及することすら奇妙に思われるかもしれない。しかし、だとすればまさにそのことが生活改善運動の成果だということができる」とし、「住宅を家族本位にしようというのは当時においては革新的な思想である」と断言したうえで、「具体的には洋風の居間（家族の団欒の場）を中心とする平面計画を採用し、子供も含めて家族の構成員に個室を与えることを意味する。障子や襖で仕切るのではなく、ドアで隔離された個室を与えるというのはそれまでの日本人の生活様式にまったくなかったものだった」と評価されている。



生活改善同盟会出品



あめりか屋出品

〈居間中心住宅の背景〉

この居間中心住宅こそが、山の手の生活意識が生み出した住宅様式であり、こうした住宅が生まれた背景を探ってみる必要がある。

まず最初にあげられるのは、日露戦争以後進行した日本の産業革命は、第一次大戦後、軽工業から重工業への転換により工業生産が農業生産を上まわるようになり、日本における近代資本主義の確立が行なわれた結果、東京の都市化が急速に進んだことである。この過程のなかで、「官庁街、ビジネス街、下町・臨海の労働者街が形成され、東海道線、東北線、中央線、山手線が開通し、路面電車、市街自動車も運行を始めた。また、日比谷公園、東京駅が完成し、公衆電話（京橋）、ビヤホール、カフェ、デパート（三越）、帝国劇場、東京歌劇座も登場した。『ハイカラ』が文明の代名詞となり、蓄音機・レコードが普及し、映画『ジゴマ』が大当たりし、『銀ブラ』の言葉も流行した」のである^{*28}。こ

の都市化の進行や資本主義の発展は、経済的発展による生活の豊かさや、文化的多様性を生み出すと同時に東京における貧富の差の拡大や近代生活への落後者を生み出していく。これに対し、キリスト教的人道主義から社会主義にいたる様々の思想が問題の解決を目指して都市を舞台に展開される。生活改善運動は、まさにこうした背景のもとに展開されていった。しかも、民間の運動が、生活の理想像を提示する啓蒙的性格をもっていたのに対し、行政サイドの運動は、社会主義や婦人開放運動の盛りあがりや抑制し、国家社会の安定をはかろうとする政策的な性格をもっていた。明治36年に「家庭の友」を創刊した羽仁もと子や、「家庭雑誌」を出した堺利彦らは、民主的な家庭生活を基盤として生活の合理化や簡素化をすすめ、主婦を家庭管理の主宰者として位置づけているのに対し、文部省は、技術主義的な立場から生活改善運動をすすめ、形を変えた良妻賢母主義の女子教育としてとらえていた。しかし、官民二つの生活改善運動は、異なる傾向を示しながらも対立することはなく、むしろ相補い相刺激しあって展開していく^{*29}。この二つの運動の奇妙なバランス関係が、山の手の生活意識を象徴的に示していると思う。生活経済学者の森本厚吉は目標とする生活を文化生活と総称し、それを実行できるのは、都市の中流階級とりわけ知識階級であるとして、彼等を中心に運動を実践しようとしたが^{*30}、まさに山の手の住人が対象とされたといえる。経済の発展の恩恵の享受者であり、社会階層としては中の上以上の生活をしているが、その多くが教育のレベルも高く知識階級として先進的な思想・信条の理解者で、文化的教養も高い山の手の住人を主人公として、節約を奨励し「浮華軽佻」な消費を戒める日本女子大学、津田塾、基督教婦人矯正会等が出展する「消費経済展覧会」の開催（大正11年）と三越百貨店の「家庭電化展覧会（大正12年）」及び、「新設計台所展覧会（大正15年）」が見事なコントラストを形成し^{*31}、「婦人之友」「婦人公論」「主婦の友」「婦人倶楽部」「女性」「女性改造」等の婦人雑誌が、今振り返っても相当幅広い思想的尺度のなかで共存した。これらの雑誌は、戦前の本や雑誌が残った山の手の家には、必ずどれか一種類はあり、親の世代の思想的傾向を理解するのに役立つものである。

〈山の手の生活意識のベース〉

さらに、居間中心の住宅様式を生み出した山の手の生活意識のベースとなっているものに、山の手の住人の社会的地位や経済的安定と思想的革新性や教養水準の高さとのバランスの取り方がある。高根正昭氏は、大正9年における331人の日本の政治的エリートをサンプルに、教育水準と政治的地位の関係を調べている^{*32}が、これによると、華族グループでは、教育水準と政治的地位との関係がほとんどないのに対し、士族グループでは高等教育を受けることが、高い政治的地位を得るのに必要であり、さらに平民グループでは高等教育を受けることが決定的に重要になっている。高等教育や海外留学等で習得した学問や技術を活かして社会的経済的には一定の地位を築くが、同時にこうした知識がそのバックグラウンドとして持っている価値感とか理念・信条の様なものも体の中に染み付いてくる。しかし山の手の住民の場合、こうした思想的信念が社会的改革の方向に向かわず、家庭のなかにおける改革が主題となっていたのではないだろうか。家族本位で合理的な生活を営み、文化を楽しむことがその目標となった結果、社会主義的な過激な行動として社会的に展開するのではなく、緊実な生活改善や文化活動として、キリスト教（特にプロテスタント）の生活信条やアメリカの婦人活動の影響を受けて、生活の場である家庭を中心に行なわれる。

その結果、虚礼廃止や悪習打破による生活の簡素化、家事労働の軽減と能率化、健康な生活のための衛生面の向上、接客本位でない居間中心の住宅、イス式の生活、さらにはスポーツや音楽などの多彩な余暇生活などとなって山の手の生活意識が形成される。

もう一つ付け加えると、この時代になると、山の手の住人も世代交替の時期を迎えることになる。明治期に立身出世をめざし、故郷を後にした人達は、いずれは故郷に帰り、その骨を埋めるつもりだった。その典型が森鷗外である。明治5年、11才で石見・津和野から上京し、戸籍も東京に移し、ずっと東京に住み、そのまま死んだが、死ぬ前に有名な遺書を残した。「死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ奈何ナル官憲権力威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」と。しかし、彼等の子供の世代では、生まれた時から東京で生活しており、「江戸東京」の伝統と「近代」の文化を併せて身に付けている。この東京に生まれ東京を故郷とする土着層を高橋勇悦氏は「モダン東

京人」と呼んでいる^{*33}。永井荷風は小石川で生まれ、アメリカやフランスで学び、帰国後、山の手（大久保余丁町及び麻布市兵衛町）に住み下町を徘徊した^{*34}。彼等は家族中心の生活意識や衣食住における洋風の生活が身につけており、それを自由に展開する場を求めて郊外住宅に新鮮さを感じている。例えば、山田邦子は

東京の郊外は、いまだ若さのふくまれた明るい生々しさが動いています。・・・
東京には土にも人にも若い味があります。排他的でない暖かさがあり、おのづからなる創造力がひそんでいます。之が東京の味です。（『婦人公論』大正13 年5月号）

と言っている。また田園調布での暮らしについて、大川邸の夫人は、次のように語っている^{*35}。

関東大震災で家が壊れてしましまして、それで、田園調布に移り住むことになりました。土地の契約は、震災の2、3年前にしておりました。渋沢栄一さんのおぼっちゃまとうちの主人がたいへんご懇意にしておまして、渋沢さんのおすすめで土地を買いました。そのころは20、30軒の家が建っている程度で、4丁目の私どもの家から田園調布駅の赤い屋根が見えていました。

渋沢栄一さんは、田園調布の景観とそこでどういう生活をするべきかということをお考えになっていらしんでしょうね。契約時の約束事として、建物敷地は宅地の半分以下とし、家の周りに土塀などの囲いはしないようにとありました。ですから、どこのお家もお庭が広く、周りは植木で囲う程度で街全体が開放感にあふれていました。そんな明るい環境のせいでしょうか、お友達とはお庭から出入りするというフランクなお付き合いでした。

ガスも水道も通ってなくて、電気だけでしたから、さっそく渋沢さんから電気製品をすすめられました。外国製の電気製品の展示会を、渋沢さんのお屋敷でなさったんですよ。私どもでも、ウエスティングハウス社製などの電気レンジや掃除機、扇風機、洗濯機、アイロン、ストーブなどを使うようになりましたね。おかげで電気代がかさんで、初めて請求書を手にしたときはびっくりしました。

部屋も、居間を中心に蛸の足のように広がっておりまして、南側の庭に面した書斎や居間、寝室などはさんさんと日の光が入ってきて、明るくて気持ちいい部屋でございました。居間には庭へ出られるドアがございまして、家族の者もご近所のお友達も、そこから出入りしておりました。

当時の家は、洋間が応接間として独立している形が多かったんですが、私どもの家では、居間と食堂が続き部屋で、ガラス戸でつながっておりましたので必要なときはとても広く使えました。食堂と台所もハッチで通じておりました。台所は、目に見える所にはいっさい物を置かないよう、鍋や食器類は全部収納できるようになっていました。トイレは水洗式でした。当時、個人の家では珍しかったのですよ。

私も、これからは洋風の生活になると思ひまして、麻布の第三高女にアメリカ人の先生がいらっしゃると聞き、洋裁を習いに通いました。子どもたちの普段着は、ほとんど私が作りました。また、西洋料理も勉強しようと、婦人会が中心となって帝国ホテルへ試食に行ったり、先生をおよびして個人の家で講習会を開いたことがありました。子供たちのおやつには自家製のクッキーを焼いたり、夏ならばアイスクリームを作ったりしました。

庭にはつるバラを植えて、アーチも作りました。庭いじりは私の趣味でして、スイトピーの種などは、アメリカから取り寄せましたの。菊もよく育てました。



田園調布に建てられた大川邸(江戸東京たてももの園内復元)

家の表の道がスロープになっていましたから、冬、雪が積もったときなど、主人に教えてもらって私もスキーをしたこともございますのよ。あのころは、日本が戦争に突入する前の、いい時代でしたね。

また、目白文化村の生活についても、野田正穂等は^{*36}「目白文化村で繰り広げられたさまざまな個性的生活を通して共通してみられるのは、それぞれの家庭が慣習にとらわれない新しい生活を追求していることである」と述べているように、ホームパーティーが行なわれたり、ピアノやレコードを聴いたりして、家族の共同生活が重視され、食堂兼居間が家族が集まる共同の場となっている。

このように居間中心の家は、山の手における新しい生活意識が生んだ住宅様式であり、郊外住宅にその典型が表されているが、こうした意識はまだほんの一部の人々のものでしなく、それゆえ、この住宅様式の家の実例は非常に少なかった。しかし、この住宅のもつ意味が民主主義社会になって理解され出した結果、戦後、この居間式が都市住宅の基本形になっていく。いわば、戦前の山の手が生み出した住宅様式が、その土台となる家族中心の思想と共に普及してきた訳だが、普及するにつれ、その思想性が洗い流されて、形式的なものになってしまっていないだろうか。

〈コミュニティ形成〉

もう一つ、戦前の山の手の家に芽生えた、住宅における革新性としてあげるべきものに、郊外住宅において家の周りに塀をつくらなかったことがある。このため大川夫人の思い出にもあるように、家だけでなく街全体が開放感にあふれ、明るい環境のせいで友達とは庭から出入りするフランクなお付き合いができた。また、目白文化村での住人の証言にも「見通しがよくてどこの家にも入っていける感じでしたし、実際にも自由に通り抜けて遊びました」(坂西まゆみ談)^{*37}とあるように、山の手住宅として初めてコミュニティとのつながりが生まれている。

山の手と下町を比較して、下町は路地と長屋に代表される開かれた生活文化であり、町内というコミュニティ意識が豊かであり、人間的な暖かさを感じさせるのに対し、山の

手は塀と独立住宅に代表される閉じられた生活文化しかなく、囲まれた空間のなかで家族中心にものごとが行なわれ、コミュニティ意識がなく、土地とのつながりが希薄なため、冷たい感じがすると言われるが、実際に山の手の生活は、塀の中で行なわれていた。これに対し、郊外住宅地では、欧米特にアメリカの生活を念頭において新しい理想的な生活を営むことが目指されていた。田園調布は渋沢栄一の理想主義を実現した結果として塀をつくらせなかったため、日本の都市型の独立住宅としてははじめて、塀のないオープンな町並みが生まれた。「塀をつくらず、低い生垣とし、外から庭を見ることができるようにする」という紳士協定^{*33}を守るなかで、この住宅地が掲げる田園都市の理想への共鳴と自分達の住むまちの環境を自ら守っていく精神が生まれ、コミュニティ意識が育つようになった。大和郷における自治組織（町内組織としては日本最初の社団法人）によるクラブハウスでの自治活動や、幼稚園を住民が自主経営したことに示されるコミュニティ活動、目白文化村における「ハツカ会」（町会組織）によるプールの寄付、子供会、音楽会等の草の根的コミュニティ活動、現在でも練馬区の「みどりのモデル地区」となって保ち続けられている城南住宅における組合活動としての環境づくり、小原国芳の教育に対する理想と結びついた成城学園や玉川学園住宅地など^{*34}、郊外住宅地が目指した理想主義によって芽生えたコミュニティ意識が、戦争によってその成長が抑えられてしまったのは誠に残念なことと言う他ない。現在でもこれだけしっかりしたコミュニティ形成を目指した住宅地の開発がほとんどないことを考えると、我々は今一度これらの郊外住宅地がもっていた生活の内容と意識を振り返ってみることが必要ではないだろうか。

- ※1 大正末から昭和にかけて、新しい住宅様式が郊外住宅地等において抜け殻化し、「文化住宅」という名のもとに広がっていった。これに対し、当時においても村野藤吾「現代文化住宅の煩悶」のような批判がなされている。
- ※2 藩主の供で江戸に一年滞在すること。さらに一年後、国へ帰る藩主を見送り江戸にとどまるのを「詰越」といった。
- ※3 石高35万石の彦根藩が江戸に住まわせていた藩士の数は1,500人とされる。
- ※4 山の手の家ことばが、東京語となり、標準語になっていく様子は、水原明人著『江戸語・東京語・標準語』（講談社現代新書）に詳しい。
- ※5 小木新造『江戸東京学事始め』ちくまライブラリー。
- ※6 小林新造、上掲書。
- ※7 福沢諭吉は「旧藩情」で中津藩の中でも、上級の武士の使う言葉は、お国訛が少なく、江戸の山の手共通語に近い言葉を話していたことを記している。
- ※8 もと幕臣で、英国に留学し、プロテスタントになった。
- ※9 司馬遼太郎『明治という国家』NHKブックス 数少ない例外は全て井上馨である。
- ※10 司馬遼太郎『明治という国家』及び井上勲『徳川旧家臣のみた江戸東京』。
- ※11 安田武『昭和東京私史』。
- ※12 こうしたプライドの高い、士族出身の家長が、大正リベラリズムの空気のなかで、家族と食卓を囲んでつくり出した日本の中産階級（深田祐介解説）の生き生きとした姿が本間千代子『父のいる食卓』に表現されている。
- ※13 下町が沽券地として私有されたのに対し、武家地は、幕府からの拝領地であったため放棄された。なお、沽券地の売買には「お広目」という土地売買公示主義の制度があり、近隣との調和が優先された。（小林新造、江戸東京学事始め）
- ※14 永井荷風が育った小石川の家は3軒の武家屋敷を買い集めたものであり、庭に狐が出没した（永井荷風『狐』）。
- ※15 小林重喜『明治の東京生活—女性の書いた明治の日記』のなかに、大倉組に勤めるエリートサラリーマンの夫人が自家用の風呂ができ、喜んだことが記されている。
- ※16 藤森照信『日本の近代建築』。
- ※17 山川捨松と結婚した大山巖の原宿に建てた住宅は純洋風で五階建、赤レンガの洋館であった。アリス・ベーコン（久野明子訳）『華族女学教師の見た明治日本の内側』。
- ※18 藤森照信『日本の近代建築』、『新説・日本近代住宅史』。
- ※19 木村徳国『日本近代都市独立住宅様式の成立と展開に関する史的研究』。
- ※20 洋館＝暖炉のある家と言っても良い程、明治から大正にかけて作られた洋館・洋室には執拗に暖炉があることを理解するには、このことが重要なのではと思う。
- ※21 岩崎家でも家族の食堂は女中部屋と同じ扱いであり、洋館の食堂が最高の扱いを受けているのに対し、和館の場合冷遇されており、他家の例では主人はお膳を運ばせて別に食事をしていたものも多い。
- ※22 木村徳国『近代都市独立住宅様式の成立と展開に関する史的研究』。
- ※23 木村徳国、前掲書。
- ※24 『江戸東京たてももの園物語』（東京都江戸東京博物館発行）の座談会より。
- ※25 藤森照信『新説・日本近代住宅史』。
- ※26 武田信明『〈個室〉と〈まなざし〉』より。
- ※27 藤森照信、初田享、藤岡洋保編、『失われた帝都東京—大正昭和の街と住まい』の藤岡氏論文。
- ※28 高橋勇悦『東京人の研究—都市住民とコミュニティ』。
- ※29 野田正穂、中島明子編『目白文化村』。
- ※30 前掲『目白文化村』。
- ※31 武田信明『〈個室〉と〈まなざし〉』。
- ※32 高根正昭『日本の政治エリート』。
- ※33 高橋勇悦『東京人の研究—都市住民とコミュニティ』。
- ※34 杉浦芳夫『文学のなかの地理空間—東京とその近傍—』及び川本三郎『荷風と東京（五）』（雑誌東京人9205）
- ※35 前掲『江戸東京たてももの園物語』。
- ※36 前掲『目白文化村』。
- ※37 前掲『目白文化村』。
- ※38 山口廣編『郊外住宅地の系譜—東京の田園ユートピア』。
- ※39 前掲『郊外住宅地の系譜』に玉川学園町内会報の座談会での発言に「小原学長の街づくりの基本というのがあったな。石垣を使わぬこと、門構えをせないこと、道路の角のすみ切りにすること、高さ3尺の生垣にすること。ね、向こうの植木や花が見えるでしょ。土地を買うのに、こうした条件が入っていたんですよ」とある。

江戸とヨーロッパの融合

公人としての山の手精神のバックボーン

米村洋一

わが国は、アジア諸国の中では例外的といって良いほど円滑に、封建社会から近代社会へと移行することができた。その最大の理由の一つとして、江戸時代から明治期にかけての日本の官僚システムの成熟が挙げられる。

すなわち、司馬遼太郎氏が「役人道」と名付けているように、江戸時代の行政担当者であった武家、そして明治政府における官僚という形で主に士族によって引き継がれた日本の行政機構の中核に従事する人々が、アジア諸国とは異なる「近代的な」官僚倫理を持っていたことが、政府主導型の近代化路線を成功させた大きな条件であると考えられる。このような封建制度から近代的な社会制度への円滑な移行そのものも、既に江戸末期に準備されていた条件に負うところが大きい。

例えば幕末の外様の雄藩等では、下級藩士でも才覚のある人材は登用され、藩政において重要な役割を果たしたり、藩を代表して他の藩や外国との交渉にあたりたりしており、ほとんど公務員ないしは法人の社員に近い意識で活動している。君主はほとんど象徴的な存在と化しており、藩士は「毛利家」藩士としてではなく、「長州」藩士として行動している。

実態がこのような状態であったために、維新が成立すると、短時間で従来の禄制から俸給を受ける官僚群が生まれ、諸大名は禄制から禄券を受ける華族として、ほとんど抵抗無く、東京に移住する。（元々大名も江戸時代から「国替え」という、居抜きでの移動に慣れており、封建制度の特徴である私領としての領土意識を強くは持たなかった。このため江戸や各地にあった諸大名の管轄下にあった諸藩の土地も容易に明治政府の国有地に転換されていった。）

この点ではアジアの多くの国々とは対照的である。アジアの資本主義諸国においては、

新しい資本主義社会に移行する際に、権力を持った幹部が「大家族主義的」な意識で、一族郎党の利益を優先させるという「アジア的」習慣を断ち切ることができず、広く社会から才能ある人材を活動させる組織を形成しにくかったり、近代化に必要な設備投資やインフラ投資に資金を回りにくくしてしまい、結果として経済的な離陸を困難にしてしまうことが多かった。

それに対してわが国の明治維新においては、産業の近代化のために巨額な資金を動かしながら、鉄道などのインフラ整備を行い、製鉄などの基幹的産業分野では国営企業を先導的に立ち上げることによって、きわめて短期間に当時の先進諸国に肩を並べるような先端的産業構造をつくりあげていったが、これらの巨額な資金が個人の利益にほとんど関係なく（同時に市民生活にもあまり関係なく）、拡大再生産のための設備投資資金として、産業に還元されてゆく。

この点では明治期のわが国のリーダー達は、さまざまな不祥事で問題にされているような現代の官僚や、企業人とは異なる公益精神に富んだ行動をしている。

ここでは「山の手」に代表される人々は、公人としては、まさにこのような精神構造を持った人々であったのではないか、という仮説を持って、山の手精神の一側面を検討することにする。

1. 山の手タイプ

いわゆる山の手に住人といってもさまざまな出自があり、また当然のことながら人それぞれの個性があるので、人間について考察するとき、「山の手族は・・・」というステレオタイプな括り方をすることには問題が多い。しかしながら今回は、日本人が失いつつある特質や生活観、価値観について検討を行うことが作業の主目的であるので、敢えて類型的な記述を行い、論点を整理することにする。

明治維新の後、わが国の中枢的位置を占め、良くも悪しくも国政や社会をリードしてゆく人々が旧武家屋敷や大名屋敷を中心として、いわゆる山の手に住み着くことになる。

これらの住人の多くは明治期から大正期にかけての日本の上流階級とも言える独特の階

層をなしていた。これらの人々を「山の手族」というとすれば、それは当時の戸籍の種類で大まかに華族、士族、平民の3種類の人々からなる。以下のような分類ができる。

この階層化は明治政府が維新の成果を具現化するために行った政策の一つで、いわゆる「市民平等」の政策の下に、世襲を基本としていた封建社会から「能力あるものは出自に関係なく登用する」という近代社会への移行の象徴でもあった。

とはいえ、いわゆる山の手に住むことができたのはそのほとんどが江戸時代にそれなりの社会的地位にあった人か、維新の功労者に限られていた。これらの人々を幕末の社会的バックグラウンドごとに整理すると以下ようになる。

1) 華族：公卿及び国主、城主、武将級の武家

元公家、大名の旧華族と「華族令」によって登場した新興の華族は全く別であった。

公家華族は結束が堅く、岩倉具視の働きかけで華族会館を作り、華族銀行として十五銀行、教育機関として学習院を作ったりした。ただし、華族の中も東京に出たグループと京都から出ようとしなかったグループとに分かれた。いずれにしても公家華族の多くは幕藩体制の中で既に経済的に疲弊していたものが多かった上、維新体制の中でも就職しないか名誉職に携わり、一部の例外を除いては給料の高い官職に就くことが少なかったため、経済的には必ずしも恵まれなかった人々が少なくない。

これに対して、旧大名も華族としての扱いで東京に集められたが、大名華族は元の藩や江戸に土地などを持っていたこと、もとの藩主としての実績を背景として、廃藩置県により新しく設置された県の知事や貴族院、枢密院などの要職を得ることができたため、経済的には恵まれていた場合が多い。

また特に維新で功績のあった人々は比較的短期間で華族に列せられ、いわゆる明治の元勲を頂点に政界、軍部の中枢に君臨した。

2) 士族：旧武家

士族の多くは高級・中堅官僚になっていった。また江戸時代には郷土であった者も人望があった者（維新に功績のあった人）は士族とされた。

士族の中でも才覚のある人材は、日本が近代化に取り組む過程で登用され、一定の役割を果たすことになる。このような風土は既に幕末時代、下級藩士も能力のあるものは積極的に重要な役目に登用されたという歴史に裏付けられている。

これらエリート官僚の中には青年期に留学して欧米の大学で学んだ者も少なくない。これら留学経験者を中心として、日本がヨーロッパ型の近代化を進めてゆく上で大きな牽引力となったし、またこれらの人々の間に大正デモクラシーにつながるリベラルな気風も育っていったことも考えられる。

ただしこの世界でも、維新に与した藩の出身か、幕府側であったかによる士族としての扱いに差別があったと考えられ、維新側は高級・中級官僚になって山の手に住み、幕府側は多くが巡査や学校教師などの下級官僚になる傾向があったようである。

3) 平民：農工商

維新後の大きな変革の一つは、世襲制が撤廃され、職業の選択が自由になったことである。これにより、公式に「武家の商法」も可能になり、維新前には武士としての生涯を送らなければならなかったような者に対しても、事業家としての途が開かれることになった。さらに、士族としての家督を継がない子孫は平民となることになった。また維新以降は逆に平民が官僚としての仕事をすることも可能になった。

ただし、この階層の人々においても、既に江戸時代末期には逼迫した藩財政の建て直しのために藩主用人等の立場を得て、活躍したような事例が少なくない。

例えば薩摩藩で物産を振興し、琉球貿易を進めた調所笑左右衛門や、日本地図を完成させた伊能忠敬は元々は商人でありながら、藩や幕府の仕事をすることで士分に取り立てられている。また二宮尊徳は平民のまま、藩財政の建て直しのためのコンサルタント役を引き受けている。

これらの人材は「封建制度」の狭い枠組みにとらわれず、自由で合理的な経済活動や調査活動を行っている。

明治維新前に政商として勤王派のパトロン役を果たしたような商家は、維新後財閥として発展することもあったが、これらの本家は華族に列せられ、分家は平民として位置

づけられた。したがって平民の中にも経済力を背景として上流階級としてのライフスタイルを持ち、山の手の一角に居を構える人々がいた。

武家出身者が軍人や官僚への道を歩む者が多かったのに対し、商家出身者は蓄積した資本を下に、殖産興業への道を歩むというのが一つのパターンであった。

2. 山の手精神：武家の倫理と維新の気概、西洋のリベラリズム、合理性の共存

維新後、江戸幕府の官僚に代わって新しい人材が東京に集まってきた。

この東京に新しく移り住んできた人々は、明治20年代頃から山の手といわれる旧武家屋敷を中心に居を構え、或いは高級官僚や軍人として国政や国防の分野で新しくにづくりに取り組み、或いは財界人として殖産興業に励み、それぞれ新しいライフスタイルを身につけてゆく。

この新開地には社交の場としての役割を果たすホテルやクラブがなかったために、それぞれの邸宅がサロンとして使われるようになった。

宴会はすべて自宅で行い、新橋あたりからホステス役の芸者を呼ぶといった方法で、次第に山の手の上流社会（社交界）が形成されていった。

新しい山の手に住人達は、江戸時代にはほとんど交流することもなかったかも知れないさまざまな階級の人々であったが、いずれも明治期から大正期にかけて、わが国を政治的に、あるいは社会的、文化的にもリードしてきた。

これらの人々の多くはもちろん、維新に大なり小なりの役割を果たした人がほとんどであるが、同時に維新前にも幕藩体制の中でそれなりの地位を占めていた人が多く、封建社会のモラルと西洋文明へのあこがれを併せ持つ、独特の気質の上流社会を形成してきた。このような特質は革命によって旧体制を駆逐したヨーロッパとは異なるもので、わが国独特の山の手の精神的風土の背景となっている。

その精神的特徴を整理してみると以下のような点を列挙することができよう。

① ハイカラ精神：洋風のライフスタイル

維新に当たっては、いわゆる「尊皇攘夷」が大義名分となっていたが、その担い手達は、欧米の文明に触れるにつれて、むしろこれらの国々の文明的成果を積極的に取り入れようとする方向に転向した。

そして、この考え方は国として西洋に追いつくという目的を掲げていたが、同時に山の手という、新開地にふさわしいライフスタイルを選択することでもあった。建物を洋館にしたり、食事を洋食にするといったライフスタイルが採用されることになった。

② 武家の精神：質素な暮らし

江戸時代の武家の生活は華美を戒め、節制を旨とするものであった。

このような生活観は経済的には恵まれ、洋館に住み、洋風の暮らしができるような高級官僚の家でも当たり前のライフスタイルであったようである。

ただしこのような家庭でも江戸時代に武士が家の子郎党を養ったように、女中を受け入れ（ホームヘルパーであると同時に行儀見習いの意味もあった）書生を養い、家僕を使用していた。

もちろん、江戸時代に存在していた何人扶持といった禄制は解消され、華族に列せられた武家にも給与に相当する禄券が与えられることになり、基本的には家臣を扶養するといった様式は消滅しているが、封建時代の伝統が形を変えて残ったことになる。

いずれにせよ、このような武家の精神が、山の手の人々の精神を高潔なものにすることに貢献し、公人としては優秀な官僚の基盤となっていたと考えられよう。

③ 維新の精神：国家主義

山の手のとくに上流階級の人々は、元々明治維新に功績のあったことによって東京の中心部に集まり、男性であれば国政を担うことになった者が多い。

いわば維新の志士達とその末裔である。

とくに維新後に移り住んできた第一世代は、直接維新に関わりを持ったことのある世代であり、維新後の国家の経営に情熱を傾けることになる。

また第二世代あたりまでは父親の影響を受け、太平洋戦争前に社会的に自立できる世代であったという状況もあって、階級としての継続性が維持されていたため、後を継承する傾向が強い。

そして第三世代あたりになると、思春期が大正デモクラシーの時代であったり、それ以後の世代では敗戦後の社会の大きな変化の中で、現在に至る多様なライフスタイルへと分化してゆく。

維新後、日本を独立した近代国家としてまとめるということが、緊急の課題であった第一、第二世代に培われた時代精神の特徴の一つは、愛国的な精神であり、ともすれば軍国主義や国粹主義に傾きかねない要素を持っていた。

しかしながらこの世代は、同時に近代国家日本を形成するために、欧米への視察や留学を積極的に経験している者も多く、これら先進諸国の実力を十分に理解しており、海外での生活を通して19世紀末の高揚した欧米の気分を味わい、自由の精神を学び、新しいライフスタイルにあこがれをも抱いていた。

むしろ国づくりへの情熱が軍国主義に結びつきやすかったのは、このような情報に乏しかった庶民であり、また第三世代あたりからの官僚やたたき上げの軍部であったと思われる。この世代から内務官僚のほとんどを東京帝国大学出身者が占めるようになり、国政のリーダーの中に欧米への留学者がほとんどいなくなってくる。

④ リベラリズム：反権威主義

維新後の国づくりは、いわば国を挙げての大規模な社会実験の過程であった。

あらゆる社会システムが試行錯誤を重ねながら、新しく整備されていった。

日本にとって幸いであったことは、19世紀半ばから欧米諸国が空前の経済拡張期に入っており、楽天的で高揚した気分に含まれていたことである。

18世紀末には産業革命を経験し、いち早く近代的な国家として離陸していた英国に対し、ヨーロッパ大陸諸国はようやく19世紀に入り次々と産業の近代化を進め、19世紀半ばにはイギリスに追いつく立場になることができた。

さらに1848年、49年にはアメリカ、オーストラリアで相次いで金鉱が発見され、将来に

対る確信が強まっていった。

また膨大な資金を必要とする鉄道建設をきっかけに株式会社の仕組みが発達し、これにより短期間に近代的な設備を導入することが可能になった。これはイギリスに対して追撃の立場にあったヨーロッパ大陸諸国にとって、大きな効果をもたらし、1870年代には、ほぼイギリスと互角に競争できる立場を確立した。

この株式会社の制度は、後発の国家において新しい設備を大量に導入し、急速に近代化を進めるための資金調達の仕事としてはきわめて効果的で、やがては日本の近代化にも大きく貢献することとなった。

更に日本にとって幸運なことに、19世紀末になって第二次産業革命が起こってくる。すなわち動力源としての電力の生産と利用が始まり、内燃機関が開発実用化された。これによりさまざまな工業機械が飛躍的に進化し、第一次産業革命当時とは比較にならない近代的な工業化が始まる。さらに20世紀に入るとコンベアシステムに支えられて、自動車の大量生産も始まり輸送面でも大きな進化が始まり、さまざまな工業製品の大量生産の基盤が確立することになる。

これらの第二次産業革命の巨大な成果は、既に第一次産業革命を経験し、設備投資の終わっていたイギリスや、続いて工業化を進めたヨーロッパ諸国のような先進国ではかえって導入が進まず、後発のアメリカや日本において工業化の過程で急速に導入され、経済成長に大きく寄与することになる。

とくに日本では海外視察や留学によって、このような雰囲気をも身をもって体験した日本のリーダー達が、殖産興業を国策として積極的にとりあげ、推進することになる。

すなわち明治政府は早くから株式組織による企業経営の普及を図り、明治20年代に入ると株式ブーム、会社ブームが起こる。

当初は金融商業関係から始まったこの会社ブームは、やがて綿紡績を中心とした軽工業、更に直営軍需工業の優位の下に国策会社として出発した製鉄、造船などの重工業へと発展することになる。

資本主義経済の基幹装置である金融組織も日本銀行（1882年創設）を頂点に明治30年代にはほぼ整備されてゆく。

またこのような楽天的、革新的な気分は、教育や文化の面ではリベラリズムの精神を高揚させることになった。

この風土の中で大正デモクラシーのリベラリズムが花開いてゆく。

すなわち、政治体制にあっては、国民のさまざまな価値観や立場を反映して、無産政党などさまざまな主義を持つ政党が登場し、経済は国家の庇護を離れ、統制のくびきを離れようとする。

またアカデミズムの世界でも国家に対して自立し、富国強兵の手段としての教育から、「教養」の自己目的性を強調する、いわゆる教養主義が現れ、大学の自治という概念が確立していった。

しかしその反動として、「国家」の概念についての新たな定義も進むことになり、近代戦争を経験したヨーロッパ諸国の戦時体制をモデルとする「国民的動員」体制の発想が理想の国家体制であるとの発想も一般化してゆく。

3. 大久保利武（大久保利通の三男、妻の父は近藤庸平）、

利謙（利武の長男、1900年生まれ）の事例

山の手の精神や生活を検討するに当たって、研究グループとしてさまざまな方々にインタビューを行っている。ここでは幕末から明治、大正期にかけての日本の近代史の泰斗であり、ご自身が大久保利通の孫として、侯爵、貴族院を経験しており、また大正デモクラシーの中で青年期を過ごされたという点でも、典型的な山の手人の1人である大久保利謙氏回想録によって、山の手上流家庭のケースを参考として取り上げておく。

○生活

山の手に住居しはじめた新しい上流社会の人々は、華族令によって近代華族になった旧華族、大名とともに、近代日本のブルジョワ貴族層となってゆく。

利謙の祖父、大久保利通は麴町の品川の海に見える高台（現在の特許庁から首相官邸あたりの斜面值）に木造西洋館の家を造った。

更に利通は芝高輪に3万坪の土地を求め、ヨーロッパの貴族のように邸内を馬車で乗り回せるような道を作った。また殖産事業のきっかけになるような果樹蔬菜の種を外国から持ち帰って栽培していた。

利通の長男利和はこの別邸を継ぎ、土地の一角に家を建て、残りの土地を貸して暮らしていた。利和隠退後に利謙の父利武が大久保家を継ぎ、更に利謙が継ぐことになる。

当時の山の手の上流階級の人々は、国政・公務関係では、貴族院議員や県知事、中央官庁の局長、或いは軍人としての道を歩むことが一般であった。

後に大正デモクラシーの中で歴史家としてのスタートを切ることになった大久保利謙の父、利武（利通の三男）も各県知事や内務省・農商務省局長を歴任した。

利謙（としあき）は明治33年（1900）年に利武の長男として生まれている。

当時の山の手の住人の多くはハイカラな生活様式で洋服を着こなし、洋風の生活であるが、生活は質素で物見遊山や芝居見物に言ったこともない家庭も少なくなかった。利謙の家も同様であったが、夏の間は子どもは書生や女中が付き添って大磯や鎌倉に家を借りて海水浴を楽しんでいる。

日常生活では子どもは父母とは別で、食事子どもだけで別にとり、乳母や書生が面倒を見るという生活であった。父は女中の給仕で別の食事をしていた。

大久保家は大久保利通が明治の元勳の1人であり、本家は華族の家柄であったが、利謙の父利和は分家していたので、士族の籍であった。後に利武、利謙も大久保家を継ぐことによって華族となる。

○教育

利謙は明治41年（1908年）、最初は普通の麴町富士見小学校に入学し、次に二年生のとき、宮内庁の許可を得て同じ麴町にある学習院に転入している。

学習院は元々華族が作った学校なので、華族出身者は無条件学習院に入ることになり、

授業料は免除である。当時、利謙の家は父利武が分家していたので平民であり、学習院入学は宮内庁の審査と許可が必要であった。もちろん大久保利通の直系である本家の大久保家は華族であった。

このように本家が華族で、本人の家は士族であったり、平民であるような場合は、宮内庁の許可を得て学習院に入ることもあった。（例えば当時三井家は華族は2家で、あとは平民であったが、一族全員学習院に入っている。）

1913年利謙は学習院中等科に入学する。中等科は北豊島郡高田村（現在の目白）に移転していた。当時は目白界隈は村であった。利謙は院の規則で寮に入る。

利謙は学習院で中等科、高等科へと進むことになる。

当時の学習院は華族、氏族を中心に一部平民（財界の子弟など）が学んでいたが、華族出身か否かで差別するようなことはなく、特有のリベラリズムの雰囲気があり、「白樺」同人の里見や武者小路等が活躍したような気風があった。

学習院高等科で利謙は鈴木大拙（英語）、天野貞祐（哲学）、岡田正之（漢文）等錚々たる大家から教育を受けることになった。

この時代、利謙は自称「白樺派」の文学青年であった。当時の学習院長は乃木希介で、世間的には偶像視されていた。白樺派の武者小路実篤等は乃木に批判的であったが、それでも寮生達が招き、話を聞くことができるといった自由な雰囲気が当時の学習院には存在していた。

利謙の形容によれば「『白樺』は貴族的ヒューマニズムというべき理想主義的な文学で、学習院の土壌から育ったリベラリズムとってよい」ということになる。

利謙は学習院高等科から無試験で入れる京都大学経済学部に入る。当時は学習院から京大ということが一つのコースであった。

京大では西田幾多郎（哲学）、三浦周行（歴史）、河上肇（経済）などから学んでいる。

京大で3年間過ごした後、利謙は東京帝国大学文学部国史学科に入り直すことになった。このときから、利謙の近代史の泰斗としての一步が始まったことになる。

○留 学

維新の志士達の子弟がドイツやアメリカに留学している。エール大学には鹿児島出身の子弟が多く留学していた。利謙の父利武も米国エール大学からドイツのハレ大学、ハイデルベルグ大学、ベルリン大学で学んでいる。

つまり当時の山の手の人々の一部は、侍気分が抜けていないけれども、一九世紀末の高揚したヨーロッパの自由な気分を吸ってきて、西欧に寄せる信頼感は厚く、いわゆるハイカラな生活を望んでいた。

しかし、父利武は利謙を東京帝国大学に進ませる。これは明治後期から内務官僚は、高等文官試験を通った東京帝大出身者で占められるようになり、外国大学出身者はコネも作りにくく、不利であることを利武が痛切に感じていたからであると、利謙は理解している。

○私 塾

利謙の母、栄は1879年（明治12年）に近藤庸平の長女として生まれている。

栄は子どもの頃は外国人の家庭に預けられている。このようにして西洋の生活様式を身につけさせられたということになる。その後大山巖の娘などと私塾に通ったりしているが、正式に学校へは行っていない。当時の女性は、とくに上流階級の場合など、かえって通常の学校には行かず、私塾などで「女性としての」教養を身につけたり、他家に預けられて行儀見習いをさせられることもあったようである。

○開明官僚

利謙の父利武は一言でいえば開明官僚の典型であったようである。

侍気分を持ちながら、長いヨーロッパの生活で身につけた感覚や知識を大切に、西洋を信頼し、外国の新聞を取り、衣食住の生活の面ではハイカラな様式を取り入れている。

利武はドイツで社会政策学を学んだことや、内務省で最初に監獄局長に就任したこともあって、社会救済事業に関心を持っていた。大阪知事時代には社会事業に熱心に取り組んでいる。

利武の妻（利謙の母）栄も知事の妻として社会事業に携わっている。

活動レポート

伊藤 恵

前年からのホームコンサート研究に加え、今年はさらに「山の手の生活」についてのヒアリングを何人かの方々からさせていただいて、本当に充実した一年だったと思う。

「山の手の生活」とは一体どんなだったんだろうととても興味深く拝聴したが、どうも綿の頭の中の戦前の出来事はモノクロ、戦後の出来事はカラーとしてインプットされている為、戦前の山の手の話をうかがうと、夢のような話で、すべて美化してしまう。下町の話はどうかというと、これも又風流で粋で、昔の日本人で、なんてカッコ良かったんだろうと感心してしまう。そこでハタと思いついたのだが、山の手、下町とわけて考えているにしろ、これはある種日本人論であるなど。「山の手」の研究は、下町も含めて私達が日本人としてのルーツを求めることであり、祖先の賢い行き方を学び、そこから新たに何を私達の生活として創造できるかが、課題である。

突然私事で恐縮だが、ドイツ留学していた折、私はある親日家のドイツ人家庭に、居候として、5年間も生活を共にさせていただいた。彼らは、遠い日本から勉強に来ていた音楽学生の私を、芽が出るまでなんらかの形で応援したいからと言ってくれた。その恩返しのために、年に何回かホームコンサートをそのお宅で開いた。お客様といえば、せいぜい20人位だが、コンサート後は奥様手作りの日本食パーティーがあり、皆喜んで来てくれた。音楽好きの仲間の格好の集まり場所であったと同時に、一人の海の物とも山の物ともわからぬ音楽家の卵に、心より声援を送ってくれ、未来を楽しみにしてくれたのである。

前庭には桜が植えられ、中庭には可愛い噴水のある瀟洒な建物だったが、生活はとても質素で、毎日入浴すると水道代が高くなるのでシャワーでしてくれと言われたし、食物も残すというのは絶対悪であった。

さて、山の手の話に戻るが、私の過ごした5年間のドイツ家庭生活と、日本の山の手生活に、なぜか深い共通点があるように感じられてならない。質素と贅沢のバランスが、

絶妙なのだ。日常生活は不必要に華美にしない、しかし学問や芸術文化といった財産には惜しまないという姿勢。その共通点は、日本人が欧米で学んだ影響云々よりも、世界人として、精神的なもの、哲学的なものを持って生活している人々のライフスタイルなのではないかと想像する。

この世紀末の日本に暮らす我々のライフスタイルはどうなってゆくのだろうか。私自身は、もう一度日本人とは誰であるかということ、来年度の山の手研究を通して、改めて考えてみたいと思う。

古き良き日本人論から、新しき良き日本人像を探す為に。

犬飼素子

山の手のイメージ…立派なお屋敷、西洋館、避暑地の別荘、お手伝いさん、書生、運転手、女学校、三越、歌舞伎の観劇 etc.。

山の手文化研究についてまるで初級クラスの私には、ごくわずかな言葉が漠然と浮かぶ程度なのだが、ふと私自身の子供時代のことを思い出した。私は恵比寿と広尾の間、明治通りを少し入ったあたりに小学校の高学年まで住んでいた。通っていた幼稚園は、坂を上り青山学院の方へ歩いたところにあった。坂の上にある友人の家にはお手伝いさんがいて、台所や、そのとなりの小さな部屋でいつも仕事をしていた。廊下のはずれには蔵があり、秘密の遊び場だった。家族をお父様、お母様、おばあ様と呼び、お手伝いさんは奥様、ご隠居様と呼んでいた。ある日、庭を向いて立っている私を孫と間違えたおばあさんに、「帰ってきたら、おばあ様にごあいさつなさい。」と叱られ、飛び上がるほど驚いたのを覚えている。その友人は東洋英和の小学校に進み、連絡しなくなってしまったが…。

また、〇〇大臣の孫にあたるという男の子は、子供の目にもいつもおしゃれでお坊っちゃんに見え、私の家とは逆方向の坂の途中にある彼の家は、立派な鉄筋の三階建ての家で、やはりお手伝いさんがいて、広い子供部屋があった。他に何人もそういう子供がいたように思う。

殺風景な2DKの社宅に住む私には、彼らの家、暮らしは夢のようなものに思えた。もちろん“遊ぶ”というつながりしか持たない4才の頃のこと、その家での父親の立場、躰、食文化、社交の仕方など知るはずもなかったが、ただ、仲良しの彼らでもあまり私の家では遊ばなかったし、家の前にある駄菓子屋になど連れて行ってはいけないであろうということは敏感に察していた。自分の暮らしとは違う“山の手”をはっきり意識していたのだと思う。

社宅の前の道路を挟んで向かい側は、子供心にも狭いと思う路地があり、洗い張りの着物が塀に立てかけてあったり、長屋風の家の中からは活版印刷の音がした。駄菓子屋、トラックで近所を回る八百屋、製麺所、量り売りの味噌がある酒屋、米屋など小さな店がい

ろいろとあり、今思えばかなり下町の香のする町だったと言えるだろう。公立の小学校での私のクラスメートの何人かはその辺りに住んでいたが、私は彼らの暮らしと自分の暮らしとが違うとはっきり感じていた。社宅という特殊な、言わばホワイトカラーの同じ階層の中での暮らしは、決して山の手の側のもではなく、また下町の側のもでもなかった。

もちろん子供の私が感じた山の手、下町は、戦後約20年、東京が戦争の大打撃からようやく復興し、高度経済成長の波に乗り出した頃のもので、またあまりにもわずかな断片的な印象であり、戦前の典型的それとは全くかけ離れたものであるけれども、子供心にもはっきりと感じる暮らしの違いがあった。そしてその違いは単に経済力だけではなく、その暮らしぶり、文化として受け継がれたものの違いだったのだと思う。

戦後50年、山の手と呼ばれる地域もどんどん拡がり、その様子も全く変わった。当然のことであろう。が、もしその拡がり、変化が、経済力だけがもたらすもので文化が受け継がれず忘れ去られていくのであれば、それはもう山の手の脱け殻にしかすぎず、とても寂しく残念なことだ。

家庭のなかの「民主主義」

岩野裕一

最近、ある人と世間話をしていたら、話題が「夫婦別姓」のことになった。法務省の諮問機関である民法改正審議会によって、すでに「別姓」を認める方向で答申が出されており、賛否両論はあるものの、国会に上程されれば可決されることはほぼ確実と見られている。つまり、夫婦別姓は時代の流れのなかで既定の方針となりつつあるわけだ。

さて、ここで私が注目したいのは、夫婦が別姓を名乗ることの是非ではない。賛成、反対それぞれの立場の人たちが叫ぶその論拠について、である。

当初は、改姓による社会生活上の不利益をなくしたい、という問題から出発した夫婦別姓論議であったが、現在ではイデオロギー的な対立、つまり、

「封建的な“家制度”から女性を解放するためには、絶対に別姓が必要」（賛成派）「別姓は、日本古来の伝統的な“家文化”に混乱をもたらし、家庭の崩壊を招く元凶」（反対派）という、“家”制度そのものが、対立軸の議論になっている。

だが、果たして家の制度というのは、かくも封建的で古来から不変のものなのであろうか。9月のヒアリングの席で本間千枝子さんから伺ったお話を思い出しながら、私は素朴な疑問を抱いた。

本間さんの経験した戦前の山の手における中流家庭の暮らしの根幹には、確かに「家長たる男性を指揮官」とした、男性中心の家制度があったことは間違いない。だが、家長たちが *noblesse oblige* をもって守ろうとしたのは、「家によって結ばれている人々」であり、「制度としての家」では決してなかった。それゆえ、そうした家庭における精神的規範となったのは「リベラリズム」であり、家長は家族の構成員一人ひとりを、書生、女中にいたるまで一個の人格として扱ったのである。

また、親戚の家庭の養女となり、「二組の両親」に育てられたという本間さんの希有な、しかもみじんの暗さもない経験は非常に興味深いものだったが、思えばかつての日本の都

市中産階級は、養子制度を变幻自在に活用することによって、当人の能力にふさわしい社会的な位置を占めていった。その巧みさは、日本の近代化を成功に導いた一因とも言われるほどだったが、「姓が変わる」ということと「個人の尊厳」は、別個の問題だったはずである。

結局、いま問われているのは、「家庭」という社会における基本単位において、民主主義が根付いているのか否かという命題であり、山の手におけるライフスタイル研究とこの問題とは、密接な関係があることは明らかなだ。言い換えれば、山の手文化研究会の活動が進むに従って、「日本における民主主義とは何なのか」という、実に深く、かつ厄介な問いかけを避けて通るのは、どうやら不可能なのである。

ホームコンサートの実践というレベルから一步踏み込んで、山の手の家生活に関するヒアリング調査へと進んだ2年目だったが、3年目に課せられた宿題は重い。

鈴木伸子

「山の手」は家の中に文化がある。「下町」は家の外に文化がある。

研究会のヒアリングで、松川公一さんが指摘した、山の手と下町の違いを表すポイントは非常に明確に的を得ていたと思う。

96年2月号の『東京人』で、「山の手」特集を企画してみた。今まで、「山の手」は住宅街でしかないから、歩いてもおもしろくない。「家の外」に文化がないから、読者の関心を魅くことはできないと漠然と思い込んでいたせいもあって、ちょっとした冒険だった。

山の手研究会でお世話になっている方々にもご登場いただいてできあがった「山の手」特集号は、大好評で売れ行きも上々だった。特に、本間千枝子さんや吉武泰水先生ご夫妻をはじめとする方々に、戦前の山の手暮らしを語っていただいた企画が話題を呼び、取材させていただいた側としても印象に残る仕事になった。

ここ数年は、世の中の傾向として景気が悪いということもあり、外で遊び呆けるよりは、家に帰って家族と一緒に過ごそうという風潮があることは確かだ。子どもの教育に熱心だったり、友人を家庭でもてなしたりという昨今流行りのライフスタイルは、戦前の山の手には、そのお手本を求められるものである。「山の手」特集が受け入れられた背景には、そんなことがあるのではと思う。

戦前の山の手暮らしについて話を聞くと、そのバックボーンには精神性に裏打ちされた世界があったことがわかる。それが、自由になりすぎて行き先を見失った今の人たちをひきつけるのだろう。「『山の手』は、ひとつの精神文化であると思います」とお話下さった本間千枝子さんの言葉が、今も印象深く耳に残っている。ものを買ったり、消費するだけでは得られない何かが、今求められている。その文化は、家の中にもあるものだとしても、確実に都市性、都会性を秘めているものなのだ。

ただし、戦前にあった山の手文化は絶滅寸前とあっていい。まず山の手という地域自体が有名無実化し、まったく別のものになってしまっている。また、山の手という言葉が現すもうひとつの意味「山の手階級」も、総中流化した世の中では定義しにくくなってしま

っている。そういうなかで求められている山の手文化を、どのように新しく創りだしていくかが課題だ。

戦前の山の手家族の物語と、その背景にあった精神文化を継承すると同時に、時代に適応した新しい山の手文化が育ってくる時が来ていると思う。首都圏にまで広がった現代の山の手と、より大衆化した山の手階級候補が、先達に学んでどのような都市的な生活様式と哲学を築いていくか、それがこれからの課題だと思う。

山の手キーワード集

山の手キーワード集の作成にあたって

□山の手キーワード集について

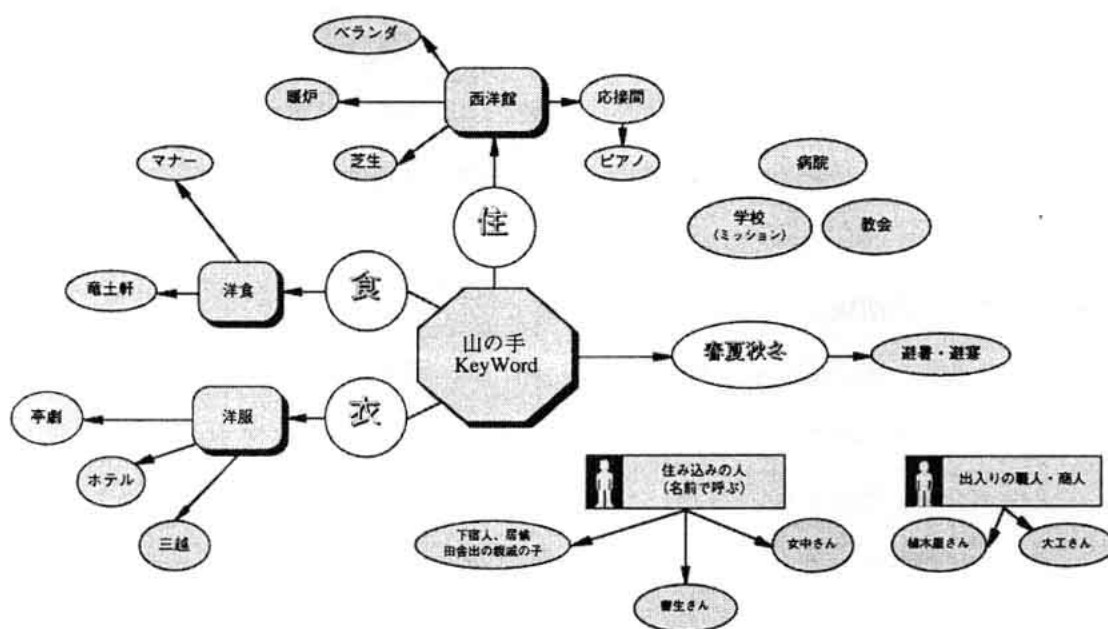
山の手に関する具体的な情報をまとめるためにも、これまでの研究活動に沿った内容で山の手キーワード集を作成する。

「山の手」の定義は、時代によって地域やイメージが異なると思われるが、今回はあくまでも戦前（太平洋戦争）の山の手を基本として、まずメンバー各自が核となるキーワードを持ち寄り、それをもとに類型化、体系化をはかってゆく。

最初の切り口として考えられるのは“衣食住”や“春夏秋冬”の行事にまつわるもの。例えば、「洋食」「マナー」「西洋館」「暖炉」「ピアノ」「洋服」「避暑・避寒」など。次に二次的要素として、これらにまつわる特定の固有名詞。例えば「三越」「帝劇」等々。また、生活にともなう学校や病院、そして出入りの職人や御用聞き、住み込みの人等にまつわる言葉があげられる。例えば「下宿人」「女中」「書生」「大工」「植木屋」。これに「分相応」「家父長制」「作法」「しきたり」「教育熱心」など、生活信条に関するものを加える。

最終的にはインデックスをつけ、必要ならば随時、写真資料等も盛り込みたい。

〔参考資料：山の手 Key Word (チャート図) 松岡氏作成〕



□山の手文化の特徴／塀の中で築かれた新しい価値観

枝川氏のお話にもあったように、山の手というのは「うちの中」での文化が中心となっているのではないだろうか。実は、この部分が山の手文化の最も基本的なところだともいえよう。特に、山の手と下町の違いを空間的に話していくと“塀と路地”という言葉がキーワードになる。山の手は塀の中での生活であり、下町は路地を介して常にコミュニケーションがある生活。

ここで山の手文化の価値観の基本を理解するためには、士族としてのプライドと学歴が結びついてきたという点があげられる。もともと士族であった山の手の人たちは、生活をするための手段として学歴にたよる以外に方法がなかった。そしてそこに、西洋の新しい価値観の流入という大きな変化。西洋の価値観を取り入れるということは既存のものに対する否定につながっていたと思われる。それはある人にとっては、徳川文化の否定であり、またある人にとってはいわゆる薩長の否定のためだった。また既存のものを否定すると同時に、新しい立場を作りあげたいという思いを背景に、当時はよく「市民権」や「自由論」が訳されていたという。

このような新しい価値観における生活は、プライベートが保たれていた山の手文化の「塀の中」の生活でのみ実現が可能であったのではないか。路地におけるコミュニケーション文化で成り立っていた下町では、逆にそれは非常に難しかったと考えられる。

明治のある時期から、この新しい価値観を公共的な場においても主張することができなくなってしまった。潰されてしまったともいえるが、それがなぜどのようにして潰されたのか、ということが最も重大な問題であろう。

□イギリスの上流階級との比較

山の手といえば、よくイギリスの上流階級と比較されることがある。暮らしの中における家庭中心の考え方や家父長制などはビクトリアに近いのかもしれない。

またイギリスではチャリティーや政治家の社会的な場面において、ある一種の自意識とか個性を感じることもあるが、それは日本でも、ごく限られた一部の人達で

あったにせよ山の手の人達の一部にそれがあったように思う。しかしこれが山の手
の一般的なキャラクターになっていたわけではない。西洋の文化や文明にあこがれ
て、取り入れていた、というだけのようで、社会に対する意識がどうであったのか
は、よくわからない。ただしこれらの習慣は、現在でも教会関係者や婦人の福祉活
動などに残っている。しかし総体的には、戦前に比べて金銭的な余裕がなくなった
ためか、それらの活動が量的に少なくなったのだろう。イギリスでも、階級制度の
属性として、現在でも福祉の部分だけはしっかりと行われている。但しこれも、子
供病院の訪問やチャリティーオークション、赤十字活動などは一種の社交行事とな
っており、文化面においては、もはやイギリスの貴族においてもほとんどお手上げ
状態のよう。むしろ現代では、彼らもアメリカのビジネスマンを見習わなくては、
とさえ言われるようになっていく。

□戦後のひずみ／山の手が失ったもの

権力と文化と福祉が結びつく世界というのは、まさにエリートそのものだった。
日本では、それらが財閥解体や民主化などといって切り離されてしまった。関東大
震災の時に旧財閥が寄付した金額などをみても、それは尋常な額ではなかった。現
在その財閥系の流れをひく“銀行”というものを考えてみれば、その意識の変化が
如実にわかる。最近特に問題視されている大蔵省と銀行との関係についても、昔と
今とでは大きく違う。銀行は大蔵省に現在ほど監督されてなかったため、もっと自
由に“経営”をすることができた。当然のことだが、倒産も多かった。ところが現
在は、大蔵省が銀行に対して監督と保護とを両方やっているため、銀行に“経営”
という言葉はなくなった。そうするうちに、あれだけ保護されていれば儲かって当
然なはずの銀行は、その社会的責任の取り方すら忘れてしまったようだ。これと同
じようなことが、人を育てる職業として社会的に尊敬されていたはずの教員の世界
でもいえる。「日教組」が組織され、とかく昇給にまつわる要求が目立つようにな
った。そして現在では、教育熱心は否定され、儲からないのになぜ責任をとらなく
てはいけないのかと。これらはすべて戦後に現れた「ひずみ」である。

こうして考えていくと、「デモクラシー」や「リベラル」という言葉は、山の手のキーワードになりうるのだろうか。元祖山の手には存在したが、それがいつのまにか、どこかで失われてしまった。現代では、むしろそのことが山の手の弱さにつながっているともいえる。

□山の手の背景にあるもの

山の手のライフスタイルの中で、物事に対して少し斜に構えるという性格がみられるが、これは御家人の流れからきているのではないだろうか。また山の手といっても、おそらく薩長や高級官僚の流れ、旧華族の流れなどで性格が微妙に異なっているようにも思われる。中には、商人の流れをくむ人もいたであろうし、そうするとそれぞれメンタリティーもライフスタイルも違っていたに違いない。しかし、立場の違いはあったとしても、今までにない新しい価値観を受容する懐の広さというものでは共通している。

油絵

油絵は、男の趣味である。そして、応接間に飾ってある油絵は、一家の長である父親が趣味で描いたもの、というのが山の手流のライフスタイルだ。レプリカの油絵はそぐわない。もちろん、超上流階級になれば、本物の「泰西名画」や藤田嗣次あたりの作品が掛かっているのだろうが。

生け花

生け花は士族のたしなみであったから、士族階級の多かった山の手暮らしと密接に結びついたのは当然のことであった。茶道と違って生け花は実用的なたしなみでもあったから、地方からやってきた奉公人の娘にとっても必修科目であり、「奥様」と呼ばれる人から手ほどきを受けたのである。床の間に生けられた花によって、四季の移ろいは家庭の中へもたらされていったわけだが、あくまでそれは「家族」の目を楽しませるためのものであり、下町の軒先に置かれた朝顔の鉢植えや、ヨーロッパの家々の窓辺を飾る鉢植えの花と対比して考えると、内向的な山の手文化の顔が浮かび上がってくるようだ。

犬

山の手のお屋敷にはたいてい犬が飼われていた。庭も広く、世話をする使用人がいるので、家の中で家族の一員のようにする今の飼い方とは違っていた。これもステータスシンボルになっていたと思う。

植木屋

西洋の庭師はいなかったので、植木屋は西洋の庭も研究して器用に庭木を和風にも、洋風にも刈ることが出来た。どの家にも決まった植木屋が出入りし、かなり頻繁に庭の手入れをしていた。

ウエストミンスター・チャイム

西洋文明が耳から入ってくる象徴であった。山の手ミッションスクールの時計はもとより、西洋館の大時計はこのウエストミンスター・チャイムが多かった。

応接間

客間とも言った。町がなかったからか、交際が頻繁だったのか、とにかく客の出入りが多く、お客を家族の空間に入れることは大変失礼なことであったから、必ず応接間があった。普通、玄関から直接入れる部屋で、洋室で、応接セットが置いてあった。逆に、普通は家族で応接間に入ることはなく、子供が応接間で遊ぶと怒られた。

お手伝いさん

女中さん参照。お手伝いさんという言葉はなかったか、ほとんど使われなかった。女の人にしろ、男にしろ、家事を手伝う機能が家を維持していくには必要であった。逆に言えば、お手伝いさんが使えなくなった時点で、いわゆる「山の手」は終わったとも言える。

外食

特別な日に家族そろって外食する。三越の特別食堂はお芝居とも結びついていて、家族の外食の象徴的な存在であった。ただ、山の手では外食は贅沢という考え方が行き渡っていたので、ある意味では良くないことにもなっていた。特に子供たちだけの外食は、友達の親が連れていく等例外を除いて禁止されていた。

核家族

「核家族」という言葉には、どこかしらマイナスのニュアンスが感じられるが、「夫婦に子供二人」といった家族の単位は、山の手では戦前からごく普通に存在していた。では、戦後の同じような家族構成を持った人たちとどこが違うかといえば、それは家長の絶対的権威である。「核」があってひとつにまとまるのが核家族であって、家族が家族として機能していないからこそ、核家族という言葉はしばしば非難めいた場で使われるのである。

カステラ

カステラは本来、長崎の居留地から伝えられたものだが、福砂屋のカステラは都心の有名デパートでしか買えなかったから、おつかいものの定番となっていた。ハイカラさと日本的な味わいが程よくミックスされたその商品性は、和洋折衷の山の手暮らしにふさわしい。

学校

公立の小学校、中学校にも名門があるのは、山の手の特徴だろう。かつては越境入学による「番町小学校→麴町中学校→日比谷高校→東大」というのがエリートコースだったが、都立高校の地盤沈下でいまではすっかり影をひそめた。一方、暁星、学習院、慶応といった、山の手の人たちになじみ深い私立の小中学校はますます狭き門となり、「お受験」のために郊外から山の手へ引っ越す家族があとを絶たない、というのだから、ご苦労な話である。

家父長制

武家社会の名残か、とにかく家という制度が厳然とあり、そこでは、男尊女卑があたりまえであった。家の総ては父親を中心に回っており、家の長であった。しかし、山

の手では時代が下がるに従って、教育を受けた金持ちのお嬢さんが地方から出てきて帝大卒業、高級官僚などの若者と結婚するケースが増え男は家長という名を取り、実質は女系というところが増えていた。

ガラス食器

衣替え、そして梅雨の季節になると、ひんやりとした台所の戸棚にガラスの器が並ぶようになる。冷や奴やそうめん、あるいは白玉と、日本の夏のメニューにすっかりなじんだガラス食器だが、陶器に囲まれて暮らしていた明治の人々にとって、この涼しげなコンビネーションは新鮮に映ったことだろう。こうした「和洋折衷」のライフスタイルを生み出したのも、山の手市民の大きな功績だった。

漢詩の書かれた朱塗りの掛け物

山の手が形成されていった「明治」という時代は、日本語の在り方が大きく変容していった時代でもあった。漢文読み下しからやがて言文一致となるわけだが、明治初期の知識青年にとって、「漢文の素養はごく普通の教養であった」（司馬遼太郎）わけである。そう考えれば、朱塗りの掛け物は一家の長老が日頃愛誦していた漢詩を若い者に伝える役割を果たしていたわけで、少し世代が下がってくると、思い出に残っているのは漢詩ではなく、「仲良きことは美しい哉」という、例の実篤のナスビの書き物である。

官僚

山の手は江戸時代の武家屋敷の周辺から外側にかけて広がった、今で言う新興開発住宅地であったから、当然、政府に登用された地方出身の官僚が住みついた。役所に勤める人が多かったのも、自分たちでは官僚が住んでいる場所という意識はなかった。

企業家

現在のようなサラリーマンは官僚を除けば存在しなかったと言って良い。“卑しくも”大学を出ているような人間は会社に入ることは、将来その会社を経営するためであったし、それは例外を除いて約束されていた。今で言うサラリーマンは使用人で別の世界の間人だった。山の手で個建の住宅を所有するか借りて住んでいる人たちは、官僚でなければ、その意味での「企業家」であった。大企業でもほとんどオーナー経営者の時代であった。

寄宿舍

ミッションスクールが地方の子女を受け入れるために寄宿舍をもっていた。ミッションスクールがたくさん建てられた山の手には、寄宿生活をしている女学生を見かけることが多く、よく話の種になった。

季節の祭事

かつて、日々の暮らしには節目というものがあつた。お正月に始まり、七草、節分、桃の節句、彼岸……というように、季節の移ろいと家庭での行事は密接に関係していたわけだ。もちろん、こうした行事を楽しむだけの生活空間が確保されていたことも大きい（いま、東京で雛人形をしっかりと飾ることができる家庭がどれだけあるだろうか？）。最近の「季節祭事」は、家庭の外で行われることのほうが多いのも、そのせいだろうか。

客観主義

客観的でなければならぬと折にふれて言われた。主観的に情に流されることが良くないことであつた。西欧の合理主義の思想のバックグラウンドにあるものが、冷静に客観的にものを見ることにあると教えられた。当時は、下町の人情に縛られた社会を批判的に見ていたこともある。

教会

山の手地区にはたくさん教会が建てられていたので、表面的にも山の手と教会は結びつく。高台の十字架の付いた白い洋風の建物は、誰の目にも印象に残つたものである。日曜日に教会に出かける人たちは特別多くはなかつたが、そのような人がいても違和感のようなものはなかつた。

キリスト教

思想的にキリスト教の影響を強く受けた<インテリ>も住んでいたが、ミッションスクールで教育を受けた子女が多くいて、山の手に独特の雰囲気をもたらしていた。婦人参政権を求める婦人運動も、キリスト教婦人矯風会などを中心に行われた。山の手に住む人の憧れの西洋への窓口はキリスト教であつた。

金庫

会社や商店と違い、家庭の金庫にはお金以外のものが納められていた。たとえば、家族のアルバム。写真が貴重品だつた時代、ということもあろうが、家族の歴史は何物にも代えがたい大切なものだつたのである。空襲で家屋敷が丸焼けになつても金庫だけは残つた、という家も多い。そんなときは、金銭よりもアルバムが残つたことが心の支えになるものだ。

クラシック音楽

日本人にクラシック音楽をもたらしたルートのうち、もっとも忘れられがちなのが「教会のオルガン」である。明治のはじめ、一般の人にも開放された音楽空間は、本郷教会におけるパイプオルガン演奏だつた。この地に教会を開設したのは、東大のエ

リート学生たちにキリスト教文化を広めることが日本への布教の早道と考えた故であったが、オルガン演奏には学生だけでなく、近在に住むさまざまな人たちが集まったという。生のクラシック音楽に接する機会が早くからあったという事実が、山の手と音楽の密接なかかわりあいの原点に存在したのである。

稽古事

稽古事は、「暮らしのゆとり」、「親の教育熱心さ」、そして「地域における一定の需要」という3つの前提条件が揃わなければ成り立たない。逆に言えば、民度の低いコミュニティに稽古事は存在しないわけで、全国津々浦々にピアノ教室やら学習塾がひろまったのは、結構なことと言わねばならない。だが、「生活のゆとり」というのがあくまで“金銭的なゆとり”になっているため、本来目的としていた“心の豊さ”を育てる、という心が忘れ去られているのは残念である。果たして、自分の子供が弾くピアノに耳を傾けたことのある父親は、いったいどのくらいいるだろうか。ホームコンサートの原点も、そうしたところにあるのだが。

けじめ

武家社会からの名残であろう。けじめを付けるという言葉はよく聞かれた。ただ、現在のように出処進退の場面のような大げさな使われ方もあったが、むしろ日常のマナーであった。

下宿人

故郷から出てきて東京の学校に入った親戚、知人の子弟を預かることがよくあった。もちろん三食付きで、一部屋を与えられ、洗濯などは女中さんがやってくれるので、何不自由ない生活を送れた。ただ、親元が貧乏で仕送りに事欠くような場合、書生のように家の手伝いをやったりするケースもあった。

結婚式場

最近では、結婚式場というと「日本閣」やら「玉姫殿」を思い浮かべてしまうが、山の手における結婚式場の王道は、椿山荘、八芳園、雅叙園といった、広大な庭園を擁する和風の施設である。ホテルとも、式場業界の新興勢力とも違った独特のゆとりを持った空間は、山の手ならではの贅沢である。また、洋風を好む人々に愛されてきたのは東京會館だ。皇居の緑と都心の静けさが、山の手の人にとっては心地よい。

紅茶

おいしい珈琲を飲ませる店は多々あっても、おいしい紅茶を飲ませる店は非常に少ない。それはおそらく、「紅茶は家の中で飲むもの」という意識があるからに違いない。そしてまた、珈琲は大人の飲み物であり、紅茶は家族の飲み物である。だからこそ、

山の手暮らしには紅茶が似合うのである。

合理主義

虚礼、華美な服装など贅沢な生活を戒めるため、合理主義と盛んに言っていた感じがある。従って、本質的な意味を持って使われてはいなかった。ある場合には、ケチな人を「合理主義者」と言って馬鹿にしたこともあった。

コーヒー

コーヒーと紅茶は家庭によって分かれていて、アングロサクソン系のミッションの教育を受けた子女がいる家では紅茶が出されたし、フランス文化の影響を受けた家庭や、外出の多い社交の頻繁な人たちがコーヒーであった。それでも普通の家では扱いが難しく、コーヒーはあまり出されなかった。

御用聞き

作家の枝川公一さんが「山の手」には町がなく家の文化だったとっておられるが、山の手では日常の買い物は町に出るのではなく、家に来る御用聞きが中心であった。八百屋、魚屋、米屋、酒屋、豆腐屋、炭屋、氷屋と何でもやって来て、勝手口から「ちわ～、〇〇屋でござい～」と声をかけるのである。

財閥

敗戦後、GHQから財閥解体の指令が出されたのは昭和20年11月のことだった。「経済の民主化」の名のもと、占領後わずか3ヶ月足らずでこうした命令が下されたわけだが、結局アメリカ型の民主主義社会が日本に根付かなかった一因が「財閥の不在」にあることは皮肉としか言いようがない。「経済」ではなく、「社会」という視点から財閥をとらえた場合、本当に必要だったのは財閥の解体ではなく、財閥の教育だったのではないか。そして、旧財閥の持つ資産が切り売りされた結果、山の手コミュニティは大きく形を変えてしまったのである。

坂道

山の手は高台にあるから、当然坂道がつきものである。坂道にはそれぞれ名前がつけられている。そこには昔から伝わる物語があり、文学作品が生まれ、流行歌が飛び出した。自動車ですと通り過ぎてしまうだけの坂道からは、果たしてどんな文化の産物が生まれてくるのだろうか…。

サンルーム

広い庭に面して居間の横のドアを通してサンルームに抜けられるようになっている、といった間取りで作られているところがあった。そこには、花や観葉植物と一緒にテ

ーブルと椅子が置いてあった。焼けた赤坂ニュージャパンのアパート部にサンルームをしつらえた部屋があって、山の手の名残を感じたものだった。

士官、将官

市ヶ谷台の陸軍参謀本部に勤務する職業軍人たちの多くは、その周辺、つまり山の手エリアの住宅地で生活をしてきた。よき官吏であり、おそらくよき父でもあったであろう彼らが、結果として日本を存亡の淵に立たせてしまったのはなぜなのか。歴史に「もし」は禁句だが、もし彼らの生活基盤が、家庭という閉ざされた空間と限られた交友範囲のなかで社会生活が営まれる「山の手型」ではなく、他との結びつきや地域に根ざした「下町型」の空間であったならば、日本の進む道はまた違ったのではなかろうか。

士族

山の手に住人は元を辿れば、地方の士族の末裔が多い。薩摩、長州、土佐など官軍に属していた人々が東京で官職に就いて、家屋敷を置いたところが、山の手地区に広がっていた。従って、古い時代は特にライフスタイルの基本に士族階級が持っていた生活に対する考え方が強く反映されていた。

質素

山の手の人たちの美徳をいうのであって、決して、貧しくも、ケチでもない。むしろ成金の華美をバカにするために使われた言葉といってもいい。元々は士族階級が山の手に住居したから、その精神を受け継いでいると思うが、そちらは合理主義に転換していった。

私鉄

東京の私鉄の発祥を会社毎に見ると、その路線によって多少の違いはあるが、次の3つに大別することができる。

- 1) 有名寺社参拝型：京成電鉄（成田山新勝寺）、京浜急行（川崎大師）、京王帝都電鉄（高尾山）
- 2) 有名観光地型：東武鉄道（日光）、小田急電鉄（箱根）
- 3) 近郊住宅地型：東急電鉄

鉄道を建設し、沿線に住宅を開発したり大学を誘致することによって乗客を増やそう、という東急や関西における阪急の手法は、鉄道会社が「街づくり」を手掛けたという意味において、企業によるライフスタイル提案の先駆けであった。それらが理想とした山の手的生活様式は、やがて鉄道沿線に移入され、今日の「全国総山の手化」に至ったわけである。

芝居

歌舞伎座、新橋演舞場、帝劇、東宝劇場、三越劇場など、お芝居に行くことは、山の手の人々にとって最大の楽しみの一つであった。もちろん、俳優のひいきなど芝居そのものを楽しんだが、それ以上に、何を着ていくかが問題だった。和服も洋服もあったわけで、そこで流行のファッションが競われたし、お互いに品定めをした。何処のお家の誰それが、どんな洋服を着てきて、それが品が良いとか悪いとか、いつも話題の種になった。

芝生

西洋館と芝生は山の手風景としては一体のものである。建物でも和洋折衷があったように、庭でも一部は日本の庭、一部は芝生というところもあった。芝生の上で子供たちが犬と遊び、それを両親が見守るという図が誰にも思い浮かぶ。気候の違いや、品種の違いで、西欧の芝生に近づけるために関係者は大変苦労したようだ。

自閉（自塀）

長屋暮らしで隣家との境界が名実ともになかった下町の暮らしと比べると、山の手の家屋では垣根や塀によって境界線がはっきりと仕切られており、お互いは一定の距離を保って生活していた。たが、垣根や塀は、隣家との交流を拒むために存在したのではなく、山の手生活の単位である「家族」（家庭）の結束を象徴するものと考えべきであろう。隣家との関係はドライではあったが、決して冷たいものではなく、ある距離感を持ちながら家族ぐるみで接するのが常であった。

社会活動

キリスト教の影響を受けた人たちが中心になって、女性、青少年、経済的困窮者、病人など、当時の社会的弱者を救済するための活動が盛んに行われた。山の手の人々に吸収された西欧の思想の中には、西欧社会の資本主義の矛盾と闘う考え方も、そっくり伝わっていた。一部では知識階級の道具となったきらいはあるが、現実的な人々によって、弱者の中に直接飛び込んで、一緒に問題を解決していこうという社会活動になっていった。現在のボランティアの日本の根はここにあるといつてよい。

写真館

有賀写真店などの名前の入ったセピア色の家族写真は、素人がカメラを持って写真を撮るなどということが一般的でなかった頃の懐かしい記念である。何かにつけて「家族の記念」を思う時代で、正月、節句、誕生日、入学、卒業、出生、転勤などには家族揃って写真屋に行って撮ってもらう。

出張カメラマン

写真屋に行くときもあったが、親戚などが集まって人数の多いときは、写真屋に来てもらうこともあった。助手を連れて写真屋がやってきて、和室を二部屋か三部屋ぶち抜いて、集まった人々にポーズをとらせる。黒い布をかぶってピントを合わせ、助手がマグネシウムを炊くフラッシュで調子を合わせて、ゴムのシャッターを押す。シュポといって天井にマグネシウムの煙が吹き上がるのがなんともおもしろかった。

出版

山の手「地場産業」といえば、印刷・製本、そして出版業である。老舗と言われる出版社を創業したのは、博文館の大橋佐平（新潟）、実業之日本社の増田義一（新潟）、講談社の野間清治（群馬）など、その多くは地方出身者であり、意外なほど江戸の人は少ない。だが、著者、読者、そして制作に携わる人が集まっていたのは、首都・東京のなかでも「頭脳集積」が進みつつあった山の手であり、当然のことながら彼らはその地に社屋を構えることになったのである。

樹木

山の手街並みに緑をもたらしていたのは、個人宅の庭や寺社の境内に植えられた樹木であった。個人の管理と責任にゆだねられながら、結果としてコミュニティの人たちに安らぎを与えるこうした樹木の存在は、内向きでありながら地域との接点を失わない山の手人の生き方に、ほとんど通じるところがある。

使用人

「多くの下町育ちがそうであるように、彼女もまた物ごとの解釈が素直で、生真面目で人情の厚い人だったが、あまり散文的、単純明快な性分であるためか、使用人のつかい方が誠に拙なかった。」

上流階級

今で言う、上、中流階級には本来資産階級、中産階級とも言うべき経済的意味しかないが、戦前は、単に経済的意味だけではなく、社会的な意味と文化的な意味があった。山の手は、その3つの意味から中産階級が育っていった地域であった。とにかく自分より上だと思えば、上流階級と言っていたり、皇族を中心とした貴族を言った場合もある。厳密な定義もなく、欧米のようにはっきりとした社交界もない日本では、漠然としたものであった。

女学校

山の手で言う女学校のイメージはミッションスクールのお嬢様学校であるが、一方で女子に社会教育を施し、女性の権利の拡大を促す最大の拠点であった。

書齋

書齋は山の手の家長である父親の牙城で、象徴的な存在であった。現在に比べると時間的な余裕のある時代だったから、読書をする時間もあった。他に大切な機能は客の応接や家族の大切な話の場として有効に使われていたことである。

「書齋にお通しして」とか言われると、このお客は何か大切な話があるのだなと思ったものである。また、銀座の伊東屋には、書齋用の皮の立派な文房具が輸入されていて、目標とするイメージが浮かぶようになっていた。

書生

親戚、友人の子供、郷里の出身者など、なにかの縁があって上京し、家に住み込んで、手伝いをしながら学業をする。女中さんが、女主人に主として仕えるが、書生は旦那の秘書兼小遣いとしても働いた。その家の子供の家庭教師的なこともやったり、様々な雑用をこなした。食事から場合によっては学費まで面倒を見てもらい、さらに礼儀作法から「生き方」まで教えてもらった。

女中

身分差別の象徴のようにになっている言葉だが、大衆社会の現在の使われる「お手伝いさん」とか、「ヘルパーさん」とは違って、本人に対しては名前前で呼んでいて、もっと人間関係は親密であった。当時の山の手の人で女中さん無しのライフスタイルを考へることは不可能であろう。田舎から出てきた娘に都会風の躰けをして、お嫁にやるという教育課程としての機能を果たしていた。社会構造的に見たり、身分社会の人間問題として一般化するのと、ミクロの人間関係として捉えるのとは全く違う。

ショッピング

芝居の次に山の手の人、令嬢が楽しみにしたのは、銀座でのショッピングであった。当時の銀座と現在の銀座の決定的な違いは、先進性であった。当時は銀座がとにかく流行の先端であり、憧れの西欧に開かれた窓であった。銀座で舶来のものを買うことはもちろん、そこでは見るもの聞くもの総て新しい情報として価値があった。

序列

山の手人種とそれ以外と分けるのは文学的には可能であろうが、山の手の人種もピンからキリまであった。戦前は身分制度もあり、貴族がいたりしたのだから、上は皇族から平民に至る階級は多様であった。付合の世界では、この階級の違いは微妙に影響した。しかし、様々な階級があったので、相対的なもので、結婚などで家格が問題になる時以外はそれほど気にならなかった。つまり、上もあれば下もあってバランスが崩れなければ良いのであった。

ステンドグラス

玄関の入口にステンドグラスをはめ込んだ家があって、午後の日差しが上がりがまちに、赤や緑や青の光線が映ってきれいだった。山の手西洋館には、玄関や階段の踊り場や、応接間などの一部にステンドグラスをはめてあった。

成城

田園調布と並び称される東京の高級住宅地。当初は住む人も少なく、住民誘致のために有名映画スターなどに格安で土地を提供し、高級イメージを植え付けていったという。

西洋文化

明治から昭和の戦争に至るまでの西洋志向の風潮が家庭にまで強い影響を及ぼしていたのは、日本中で東京の山の手が一番であったと思われる。西洋館に住み、カーベットの敷いて、洋家具を使い、洋画の油絵を飾り、ピアノを置いて、蓄音機にレコードをかけ、現在の洋風に暮らしている人たちより遙かに西洋風なライフスタイルをして、西洋文化を体現していたのが山の手に住む人たちだった。

大学

大学ができると、コミュニティが生まれる。山の手におけるその典型は本郷、神田、早稲田だが、学生街を特徴づけているのは古書店の多さであろう。だが、最近の学生は本を読まないから（あるいは、コンピューター時代になって、読む必要がないのか）、いまの学生街を支えているのは「元学生」である。山の手町が成熟化しているのは、そこに住む、あるいは集う人たちの年齢とも関係しているとする、山の手と大学の縁は過去のものとなってしまったのだろうか。

大工さん

山の手屋敷では、大工は植木屋などと共に出入りが多く、絶えず家の状態を点検したり、造作を直していた。木造の建物であり、手入れしやすかったし、また手入れが必要だった。

大使館・高台

大使館の多くが山の手の高台に立地しているのは、開国当初、旧大名屋敷に欧米列強の大使館をおかれたことに端を発するわけだが、大使館が日本のなかの「異国」である以外官庁街や商業地におくことはできないわけだし、無線通信の便などを考えると高台のほうが都合がよいわけで、まさに山の手はうってつけの地であった。こうして考えると、昨今議論が喧しい新首都の建設を考えると、高台の存在は必須条件のような気がするが、どうであろうか。

暖炉

東京の気候では暖炉が絶えず炊かれることはなかったが、西洋館の居間が、応接間の象徴的な存在であった。暖炉を炊く使用人が居るというのもステータス・シンボルで、書生や爺やなど男の仕事であったことは言うまでもない。

茶会

日本の茶会はもちろんあったが、それは中、上流社会のライフスタイルに折り込まれていて、現在のように生活から分離したものではなかった。様々な交際の機会の茶会は催されていたから、嫁入り修業に欠かせないものであった。山の手茶会はむしろ、イギリスのアフタヌーン・ティーを真似たものであり、西洋館の応接間に招かれ、別荘のテラスで比較的手軽に頻繁に行われた。執事や召使がいて成り立つものであった。

中産階級

当時の山の手に住人が中産階級を意識していたとは思えない。現在の人たちが見て、当時の山の手の人たちをそう分類するのだが、それも経済的な評価でしかありえない。当時、経済的には階級が貧と富に二分され、富める階級の中で相対的に上下があったので、今で言う「中産階級」は存在しなかったと言える。

帝劇

歌舞伎座や他の劇場もあったが、なんといっても山の手のご婦人方の人気は「帝劇」だった。今でも、戦前の山の手の人たちは帝劇で公演した出し物でお互いのコミュニケーションがはかれて盛り上がるのである。もちろん芝居もあったが、シャリアピンやエルマンといった戦前の世界の名歌手、名演奏家が来日して、帝劇の舞台に登場した。今では、歴史的事実として記録されている。

出入りの呉服商人

普通、和服はデパートの呉服部からやってきた商人が反物を持ってきて、部屋に並べる。それを一家の子女が集まって気に入ったものを選び、お金を握っている女主人や隠居がお買上げになる。しばらくすると、デパートが出来上がった着物が「お誂え」という字も鮮やかな和紙のカバーに包まれて届く。それは、桐のタンスに仕舞われて晴れの日に着られるのを待つ。

出入りの職人

大工さんについては述べたが、植木屋さんや、仕立屋さんなど、下町と違って町がないので、総てが屋敷の中で行われていたので、職人が道具を持ってやってきた。商人が御用聞きに来ると同じように、職人もご用がないかと時々訪ねてきた。

職人の場合は、自分の専門のところでは何か仕事を見つけて手直しなどをして帰って

った。家の方でも心得ていて、仕事をあれこれ用意していた。手間賃もあうんの呼吸で、あるようないような感じで払われていたし、物をあげることも多かった。家の主人は職人の家庭の状況を把握していて、何かと心づかいをしていた。

寺

雑誌『東京人』の山の手特集によれば、山の手とは「上野、本郷、小石川、目白、牛込、四谷・麴町、赤坂・麻布、芝・白金の7つの台地の総称」であるという。

これらの町からお屋敷が次第に姿を消してしまった昨今、町のイメージを形成しているのがそこに残った「寺」であることは間違いない。だが、時代の流れの中で、寺もその形を変えつつある。次の時代、山の手の手並みを統一する建造物は果たして残っているのだろうか。

田園調布

多摩川に近い大田区北西部にある、都内有数の高級住宅地。イギリスの「田園都市構想」に触発された実業家・渋沢栄一が大正時代中期に開発を始めた。住宅地の形成とほぼ同時期に東横線、目蒲線が開通、「郊外電車で都心に通勤」というライフスタイルはこのとき生まれた。町会が建築規制などを制定して、住民の手による住み心地のよい街づくりを続けてきたが、ご多分に漏れず相続税の重圧に堪えかねて土地を細分化する住民が続出、放射状の並木道沿いに点々と駐車場がある虫食い状の街並みは、あまりに悲しい。

日曜学校

キリスト教の信者であろうとなかろうと、日曜学校には行く子供がたくさんいた。友達と一緒にいくせいでもあったし、神父さん、牧師さんの話しはよく覚えていないが、何か歌を歌ったり、後でお菓子をもらったり、聖書の物語が書かれたきれいな絵の入った本をもらった記憶がある。山の手の子供たちには楽しい時間であった。

庭付き戸建て

基本的には、武家屋敷の流れであろうか。家族の生活の総てが、この庭付き戸建て住居の中で行われた。これが、日本の人々の理想の住宅の形になっていくわけだが、集合住宅が長屋イメージを持っていたので、余計に階級上昇志向に乗って、庭付き戸建てが人々の願望の対象になった。しかし、当時の山の手では、それ以外の住居の形式は考えられなかった。庭が日本式か西洋式、家の造りもどちらかであったが、いずれにしても、特段の意識はなかった。

猫

犬はたいてい外で飼われ、猫が家で飼われていた。もっとも今ほど種類にこだわることもなく、たまにベルシャ猫、シャム猫を飼っているうちがあって、よく夕食時の一家団欒の時に、「あそこのお宅のシャム猫は器量よしで飼い主に似ていない」などと話題にされた。家族の少ない家で、それこそ猫可愛がりされている以外は、普通のうちでは、あまり気にならない同居人といったあんばいだった。

ハイカラ

横浜や神戸、長崎に外国人がもたらしたハイカラな生活様式は、ここ山の手に至ってようやく日本人のものとなる。その際に「和洋折衷」というフィルターを通ったのは前述の通りだが、返すがえすも残念だったのは、こうした生活様式が戦後急激に全国に広がっていく際に、その背景にある「合理性」や「リベラル」な思想が抜け落ちてしまったことだ。「山の手」と「エセ山の手」の最大の違いはここにある。

舶来品

単なる輸入品と大いに異なるのは、高級品のイメージがついてまわっていて、「舶来の万年筆」など「舶来の文化」の香りが、生活の豊かさにほのかなアクセントをつけるものであった。伊東屋、丸善などに確固としたイメージがあった。

注) 山の山人からの山の手キーワードと山の手の人以外の目に映るキーワードのイメージは違う。

ここでは前者の立場での定義である。

箸の上げ下ろし

「私自身が幼少だった頃を思い返すと、母方の祖母などに連れられて、従兄・従姉らと共に湯河原や箱根の温泉宿に滞在したことが何回かあった。しかし、あの時分の子どもというのは、まず親からして『しょせん、我が子は人様にとっては猛獣のようなもの』という自覚を持っていたから、子供たちは公共の場所に出たとき、まるでサーカスのライオンか何かででもあるかのように、親の指図どおり、ぴたっと口を閉じたり、動かなくなったりしたものだ。

食事をするときも、客室にお料理を運んでもらう他の人の迷惑にはならない。しかし、そんなときでさえ、食事をしながらふざけていたりすると、祖母が烈火のごとく怒って、子ども自身はもちろんだが、『しつけがなっていない』といって、親も揃って怒られたものである。

少なくとも私が子どもの頃までは、『子どもだから仕方がない』などという言い訳は世間に通用しなかった。」 (岩淵潤子『ツルカメ!』より)

恥

山の手文化を武家文化の末裔だと規定すれば、いうまでもなく「恥」の文化である。しかし、これも下町の文化に対して相対的に考えれば当たっているが、大正、昭和にかけて西欧文化の浸透するなかで武家文化に於いて保っていた精神的な様式美を失って、礼儀や躰けとして形式化していった。

離れ

地方から上京して勤勉刻苦、大学を卒業後勤め人となり、ある程度の社会的地位を得た頃になると、気がかりなのは故郷に残した老親のこと。そろそろ身の回りの世話も必要だが、さりとて同居は老親の気位が許さない、となると、主人としては庭先に離れを建てて、丁重に年老いた父母を迎えることになる。すっかりモダンになった家族と親では食事ひとつとっても好みが違う。離れは、ライフスタイルが違うもの同士が適度な距離感を保って暮らす、都会ならではの生活の場なのだ。

薔薇・薔薇のアーチ

最近、ガーデニングがブームになっているという。庭付きの住居に住む人ばかりでなく、マンション暮らしの若い人がベランダで花やハーブを栽培する、といった楽しみ方が増えている。『園芸家12か月』の愛読者ならわかるように、庭いじりは人生そのものだ。四季があり、嵐があり、花が咲き、収穫がある。丹精込めた薔薇の花壇は、山の手ゆとりある暮らしの象徴だろう。なにしろそれは、手間のかかる美しさだから。

ピアノ

日本人は、ピアノとオルガンを通じて西洋音楽に触れていった。その大きな違いは、ピアノは「私（わたくし）」の楽器であり、オルガンは「公（おおやけ）」の楽器であった、ということ。高価であったが故にピアノは家庭で購入され、安価であったが故にオルガンは学校などの公共機関で購入されたのである。ピアノの部屋は質素だが、ささやかな一枚の油絵が芸術的な雰囲気醸し出す。そして、庭や垣根越しに聞こえてくるピアノの音は、山の手「サウンドスケープ」だった。ときにはヴァイオリンや歌声も加わった家庭音楽会の様子が聞こえてくる、そんなよき時代も、かつての日本には存在したのである。

避暑・避寒

日本の気候では、避暑や避寒は特別に必要ななかったと思われるが、夏の涼しいヨーロッパの人たちには日本の夏の暑さは耐えがたいものであったらしく、彼らの気候に近いところを探して避暑地とした。山の手の上流階級の人々で、それを真似する人たちが出てきて、やがて彼らのライフスタイルの中に定着していく。現在はリゾートラ

イフといわれてキリスト教の研修など、避暑に伴う様々な文化的側面も忘れられている。

日比谷公会堂

昭和に入って東京にオーケストラが誕生すると、日比谷公会堂が音楽の殿堂になった。戦前のN響（新響）の宣伝を見ると、「定期会員券お求めのお客様には、自宅までお届けいたします」とある。つまり、当時の聴衆は、ほとんどが都心からほど近い場所に住んでいたわけだ。遠くても東急沿線、いわゆる「第三山の手」あたりだろうか。東急沿線といえば、新響の練習場があった洗足周辺には、音楽家が多く住んでいた。芸術の香りが漂う町、というのが、かつての山の手には存在したのである。

百貨店の外商

百貨店の前進が呉服屋であったせいか、呉服の誂えを中心に外商が利用された。大変きちんとした様子で、他の御用聞きと違って表玄関から入ってきたような気がする。今では、個人で百貨店の外商を利用するのは金持ちであろう。

武家屋敷

山の手洋風のライフスタイルの基盤となったのは、江戸時代につくられた武家屋敷であった。環境がよく、広々と敷地をとった武家屋敷の主が時代の流れの中で交代し、その良さを生かしつつ、和洋折衷の生活を築いていった。それ故、山の手生活文化は、戦後の浮き草のようなライフスタイルとは異なる、しっかりと根を張ったものになっているのである。

文化村

文化村と称したところは、市川、荻窪など方々にあり、山の手そのものより、山の手文化人的な人たちがいる程度まとまって住んでいた。江戸川や今の表参道や代官山の文化住宅という言い方も、山の手と文化の結び付きはイメージ化していた。大学教授、文人が多く住んでいたことによるのであろう。

分相応

階級社会の残っていた時代に、階級の上の者は、下の者に対して、下の者は自分たちに対して良く使った言葉。階級も細かく分かれていたので、最上階級以外のほとんどの山の手住人は、自分たちで「分相応にね。」といて儉約したり、精神的には質素な生活を心掛けるようにしていた。

別荘

週末に行ったり来たりできる人は「別邸」といって大臣クラスだったので、むしろ普通の山の手の人たちは、避暑、避寒で2、3週間から1、2ヶ月という長期滞在が普通であった。別荘のライフスタイルは西欧の人たちの真似で、それが戦争を経て昭和30年あたりまでは続いていた。現在は、ライフスタイルとしての「別荘」は姿を消していると言えよう。

ペット

ペットを飼うのはステータスシンボルであったから、犬、猫は当たり前で、鸚鵡などの鳥や、猿なども飼った。しかし、世話をするのはもっぱらお手伝いさんたちで、主人や家族は都合のいい時に可愛がり、人に見せびらかしたいときに連れて歩いた一面もある。そういう意味で、飼い主とペットの間には現代のようにベタベタした関係がなかった。

ベランダ

西洋館にはベランダがあった。他にも、バルコニー、テラスなどと呼んだりしていた。家の中でもない、外でもないこの独特な空間が、山の手文化を表すものである。ベランダが付いているかないかで、生活のゆとりの尺度になるような気がした。

誇り

山の手の人たちは、その町に住むことを誇りに思っていた。なぜならそれは、自分たちの住む町を愛しているからであり、虚栄心や見栄からくるものではない。その証拠に、彼らは誇りの代償としてしっかりと「義務」を果たしていた。自分の町を良くするには、自分たちが力を尽くさなければならない——これも一種のnoblesse obligeだろう——ことを彼らは知っていたのである。逆に言えば、ただ自分の住所に誇りを抱いているだけの人々は、本当はその地に住む資格のない人々である。

墓地

かつての山の手の外縁に当たる場所には、そこで暮らした人たちの墓地がある。青山、雑司ヶ谷、谷中と、いまではすっかり都心となっているが、明治の山の手範囲はその内側だった。ところで、墓地に比べて火葬場が場末の町外れに位置しているのはなぜだろうか。桐ヶ谷や落合、幡ヶ谷と、いずれも山手線の外側だ。もしかすると、このあたりに日本人の死生観や住居観のカギが隠されているのかもしれない。

ホテル

西欧の文化が缶詰になっている場所で、山の手の人たちは西洋の香りを嗅ぐためにホテルに行くのを楽しみにしていた。ホテルは建物から従業員のマナーまで、総てがあ

ちら風で、ドアを入ると思わず背筋を伸ばして外国人になった気で振る舞ってみるのだった。ホテルは海外に開かれた窓の一つであった。レストラン、バーなどもホテルの中にあるものが尊重され、山の手社交場となっていた。

ボランティア

現代の流行であるが、相変わらず情報の少ない日本では普通名詞が固有名詞化して、きわめて限られた概念となっている。戦前の山の手では、主としてキリスト教会やミッションスクールの平素の活動の中でボランティアが盛んに行われていた。ただ、普通名詞として考えられていた欧米の直接の指導で行われていた社会活動を特に「ボランティア」とは呼んでいなかった。従って、現在のボランティアに比べれば、こうした環境にあった人々には、自然に生活の中に組み込まれていた。

堀

四谷からお茶の水に向かう中央線に乗り、車窓に外堀が見えてくるとホッとするのは、私だけではないだろう。東京の景観にゆとりとやすらぎを与えてきた水辺を埋め立てたり、高速道路でフタをしてしまったのは大いなる愚挙であった。考えてみれば、皇居の廻りだけ残っているというのもバカにした話で、もし堀を埋め立てることに「やましさ」がなければ、真っ先にあの場所から姿を変えていったはずである。

マナー

日本の家に伝わる躰けとは違って、西洋流のマナーが入ってきた。ミッションスクールの寄宿舎などに入ると、食事その他マナーの教育が施された。もちろん形式の部分もあったが、ビクトリア時代のイギリスのストイックな精神を伝えるものでもあった。それは、武家社会の伝統の流れを汲む山の手の家風にも合うものであった。

万年筆・ステーションナリーセット

海外旅行が大衆化する以前のお土産と言えば、シェーファーやパーカーの万年筆が定番であった。高級万年筆には、ヨーロッパへの憧れがあった。そして、万年筆がまだ使えない子供たちには、ステッドラーの色鉛筆やコンパス。また、東京でこうした舶来ものを扱っていた店といえば、丸善の文房具であった（いまではすっかり伊東屋が幅を利かせているが）。山の手族のお出かけスポットだった日本橋は、半蔵門線の開通で今度は「第三山の手」と直結され、東急電車が「三越前」と宣伝しながら走る珍現象がしばらく続いたのである。

三越

デパートといえば三越であった。特にお中元、お歳暮には三越の包み紙が必要だった。高級で、礼を失することのない贈り物ができるという安心感があった。

ミッションスクール

女子大学、女学校で質のよい教育はミッションスクールでというイメージが強かった。場所的にも山の地域にたくさん建てられていて、下町からも優秀な子女が通ってきた。多くの学校は、外人の宣教師が直接監督指導していて、キリスト教の教派によって校風も違って、イギリス、アメリカの新教、フランス、スペイン、イタリア、カナダのカトリックなど様々であった。現在は監督指導者のほとんどが日本人になり、文部省の強い監督下入り、社会人としての子女を教育する理念も風化した。

明治屋

西洋の食品を輸入していた数少ない店で、山の手では誰もがすぐイメージをわかせる場所であった。お使いのものにもよく、あの包装紙を開けるときに、何ともあちらの風がサーッと吹いてくるように感じたものである。

屋敷・屋敷町

鬱蒼とした木々に包まれたお屋敷は近寄りたくない雰囲気を漂わせていたけれど、ある意味では、緑を維持管理することで地域社会に貢献していた。マンションに建て替えられてしまえば、町は森をひとつ失うことになるが、これもすべては相続税の成せる業である。

大和郷

かつて豊島区巣鴨から文京区本郷にかけて広がっていた、三菱財閥が開発した新興住宅地。居住者のためのクラブハウスや幼稚園などをもち、当初からクオリティの高い住民によるコミュニティ形成を目指したものだ。空襲で惜しくも壊滅したが、よき山の手の手が営まれていた典型的な場所で、串田孫一氏や藤島泰輔氏が雑誌『東京人』にその思い出を寄せている。

山手線

当たり前のことのようにだが、山手線の車窓から見える東京は、常に内側のほうが標高が高い（目黒川および神田川が谷をつくっている目黒、目白周辺は除く）。つまりこの鉄道は、東京山の手台地の外縁を結ぶルートをとっているのである。

ちなみに、山手線の主要駅をターミナルとした東京の私鉄は概して西側に向かって発達しているが、こうした路線網の発達が郊外に山の手のリライフスタイルを運んでいったことは、地政学的に見ても興味深い。

洋菓子

ハイカラな町にケーキやクッキーの美味しい店があるのか、はたまたその逆で、こうした店が町の雰囲気をつくっているのか。ただ、そのどちらにも共通しているのは、

その店を支えるお客さんの存在だ。おいしいパン屋さんにしてもそうだが、はじめは横浜や神戸、続いて山の手へと広がっていったであろうその歴史は、日本人の生活が西洋化していくのに軌を一にしている。良い店からは、コミュニティの質の良さも感じられるのである。

洋館

洋館を洋館ともいった。赤煉瓦と白い壁の洋館は山の手の特徴であった。外国で勉強してきた建築家などが建てるもので、デザイン的には日本的にアレンジされている度合いが少なく、「ドア」を開ければ西洋の香りが漂ってくるようであった。唯一の問題は靴を脱いでスリッパにはきかえることであった。それでも、床や手すりがピカピカに磨き上げられて、洋服、エプロン姿の女中さんが応対に出てくる別世界であった。
(建築学的な考察は水野論文参照)

羊羹

羊羹やカステラに山の手イメージを重ねる人もいる。山の手のお宅に訪ねて行って、西洋館に入って、西洋間に通されて、出されたものが、日本茶なら羊羹、紅茶でカステラが多かったからだろう。

洋室

山の手和風の建物でも、応接間と書斎は洋間とか、一部を洋室にしているところが多かった。そこにピアノが置いてあったり、家の中では西洋の風が吹くところであった。現在は洋室を和風に使っていたり、家具と電気器具の占拠している状態が多いが、戦前の山の手では、西洋間として、部屋に調和した家具が中央にあり、整然としていた。日本間に比べ窓が小さくカーテンがあり、静かな、やや暗い部屋であった。

洋食

和食が当たり前であったから、洋食はハイカラなもので、普段家では作れないものだった。洋食を食べに行くには、ホテルか、レストランしかなかった。オムレツ、コロッケが代表的なもので、コースともなれば特別な場合のメニューだった。今も結婚式でフランス料理のコースを食べさせられる度に、洋食が特別なものであった時代が髣髴とする。

洋服

男はともかく、戦前の女性は和服が普通であったから、洋服イコールよそ行きであった。山の手の子は下町に比べれば洋服が多く、ミッションスクールの制服なども合わせて、よそ行きの世界を作っていた。また、外からはそのように見られていた。当時の婦人雑誌は女性の啓蒙を売り物にしていたから、洋服の紹介に人気があった。

竜土軒

西洋料理を食べに行こうというと、麻布、六本木界隈では竜土軒だった。コックは元有名ホテルに勤めていたコックで、フランス料理を出した。今の本格的なフランス料理というより、いわゆるコロッケ、フライなど西洋料理が中心だったが、スープから始まってコース料理が出された。場所柄二・二六事件の策謀の舞台にもなったが、普段は山の手家族連れの楽しい舞台であった。

ローマイヤ

西洋の食べ物を作って食べさせる老舗であった。贈答品にお土産に第一級のイメージで、また、めったに行けないレストランであった。ハム、ソーセージ、ベーコンは普段は贈り物にするだけで自家用にはなかなか買わず、頂き物としてもらったときには喜んで食べるものだった。

ワイン

ワインが一般家庭の食卓にのぼるようになったのは、戦後というより、つい最近のことに過ぎない。ちょうどオイルショックの時代、某メーカーが「赤玉ポートワイン」から「金曜日はワインを買って…」とその宣伝を切り替えたあたりである。それはまさに、高度成長を成し遂げた日本がひと息ついて、「豊かなライフスタイル」を模索し始めた時期にあたるのだ。

和洋折衷

完全に西洋のライフスタイルを知らないから、必然的に和洋折衷にならざるを得なかった。衣食住、総て程度の差こそあれ和洋折衷で、「洋」がついている「洋服」「洋食」「洋館」が純粋な西洋のものではなく和洋折衷であった。「和」は古いものを、「洋」は新しいものを代表するものであった。日本人が外部のものを取り入れるのがうまいといわれるが、極東の情報の少ない国で仕方なく折衷が行われたともいえる。

95年度 活動報告

吉武邸における「うぶすなの会」ホームコンサート

《演奏》 吉武由子（ソプラノ）・伊藤 恵（ピアノ）
《曲目》 シューマン 女の愛と生涯
モーツァルト ソナタKV330 ハ長調

1995年9月15日
午後2時開演

研究会では、95年1月に起きた阪神大震災の復旧活動支援コンサートに教訓をうけ、今後は幅広くチャリティー目的のホームコンサートも計画していこうということになった。今回は、さまざまな選択肢の中から研究会メンバーである伊藤恵氏の友人で白血病に苦しんでいる方へのチャリティーを目的とするコンサートを計画することになった。この話を、当研究会が昨年7月に葉山で行った旧東伏見宮別邸でのコンサートに出演して下さった吉武由子氏にお話したところ、吉武氏の支援団体である「うぶすなの会」のホームコンサートで協力していただけることになった。

もともと「うぶすなの会」のホームコンサートは、会員の方に吉武由子氏をより身近に知っていただくためのもので、これまでも数回吉武邸の一階ホールで行われているものだったが、今回はハイライフ研究所との共催によるチャリティーコンサートという形で行い、演奏は吉武由子氏と伊藤恵氏のお二人をお願いすることにした。招待客は通常の、「うぶすなの会」の会員の方を中心とし、研究会側からの招待客は若干名とした。

当初計画していた伊藤恵氏のご友人のためという話は、ご本人が一個人に対してでは申し訳ないということで固辞されたため、財団法人骨髓移植推進財団への寄付という形へ変更。チャリティーの方法としては、当日コンサートへ来られた方々から一人3000円以上の寄付をいただくことにした。（財）骨髓移植推進財団へは事前に寄付の方法を問い合わせ、その際にチラシ、ポスターの頒布掲示を依頼された。

当日は研究会メンバーが「うぶすなの会」事務局を補佐する形で準備を進め、午後2時に開演。吉武由子氏より開催までの経緯などを含めてご挨拶いただく。演奏間の休憩は10分程にして、後半の演奏終了後に軽食を含めた立食パーティーで懇談会を催した。この日は御夫婦での参加者が多く、またチャリティー目的という主旨からも幅

広い交流がなされた。

集計の結果、このホームコンサートへの参加者はうぶすなの会スタッフ、当研究会関係者を含め総勢44名で、合計171000円の寄附金が集まり全額（財）骨髄移植推進財団へ寄付された。



[演奏者挨拶 吉武氏(左)・伊藤氏(右)]



[コンサート風景]



[歓談風景]



枝川公一氏 ヒアリング

1995年10月16日

枝川 公一：東京向島生まれ。

出版社勤務の後、フリーランス・ライターとなる。

自らの体験をもとに、さまざまな都市の魅力を、人間と生活を通して見つめる。

主な著書に『都市の歩き方』（北斗出版社）、『サンフランシスコ旅の雑学ノート』（新潮文庫）、『ニューヨーク世紀末』（光文社）、『今日も銀座へ行かなくちゃ』（講談社文庫）、『上海読本』（西北社）、『都市の体温』（井上書院）他多数。

研究会メンバーである松岡温彦氏の紹介で、これまで東京という都市を自らの視点で見つめた著書を手掛けられている枝川公一氏に、「山の手」に対するイメージと現状について、また変貌する山の手について、ご自身の見聞や体験をもとにお話していただいた。

□山の手イメージの原型

僕は現在の東向島（当時の寺島町）の生まれですが、山の手と言われてまず思い出したのは、母親のことでした。母親も生まれは東向島で履物屋の娘なんですが、女学校が本郷の佐藤高女で、都電に乗って通っていたようです。その女学校時代の話で、よく学校でみんなで話しをすると「お兄様が…」という言葉が使われていて、自分だけが違う世界の人という気がしたとっていました。話し方から、それぞれうちの状況がきちっとわかるような家庭をみんなが持っていたと。そこから落差というか格差をすごく感じていたようです。

母にとっては、その佐藤高女に通っていた時代は非常に特殊な、でも特別な時代だったわけです。生まれ育って小学校までは第二寺島小学校ですが、その後、12歳の時から5年間佐藤高女に通って、でもあとはずっと履物屋の娘ですから、その5年間の記憶は自分の中のカルチャーにとっても強い影響を与えたようです。

そのような母に育てられた僕等にも、いろいろな影響がありましたね。

□内と外

山の手と下町との一番大きな違いは、カルチャーが家の中にあるか外にあるかということだと思います。下町にあるのは「街」ですね。町そのものが自分のカルチャーで、山の手の人たちにとってはそれが家の中にある。それが一番の違いじゃないかと思いますね。

それからまた、山の手の方は下町にすごく興味をもっていて、下町のことを書く人がいるんですが、下町の方は山の手に興味は持たない。下町の方で山の手のことを書く人はいなんです。“内と外”ということからなのか、山の手の方に対する関心はどうなのでしょう。そういう意味では、僕も山の手だけを書こうという気はないです。山の手に対して、町とかコミュニティという発想がないからでしょうか。山の手には、やはり個というかそれぞれの家というか、家というより屋敷ですね、そういう感じしかないからなのかもしれません。

□山の手と下町の異なるイメージ

山の手といえば、門と壁というのがイメージとしてありますね。そしてやはり家が大きいと。あと世田谷などでは、住宅は住宅であって、商店はある一画にまとまって商店としてあるということです。下町の方では、店と住居が混在しているという印象がありますね。僕が商人の子供だからそういう見方をするのもかもしれませんが、やはり商いというものがどこにでもあるという状況が下町だと思いますね。それから下町はよく“路地があって、植木があっていい”とか、“近所づきあいがあっていい”と、よくそれを礼賛する話がありますが、本当にそうか。例えば植木は庭がないから路地に置くしかなくて、近所づきあいがいいというのは、それをしないと生活できない環境だというほうが正しいのではないか。こういうことを賛美するのは違う世界の人ですね。下町の方は、けっこう素っ気ないですよ。僕等にとってはむしろ、みんなそれぞれの生活にまわりの人達が干渉しないというのがいいところなのであって、あいつはあれでいいんだと認め合っ

生きているのが下町だと思いますね。だから、こういう物を着ているからだめだとか、これをやっているからだめだとかということは言わない。相手を認める社会です。干渉もしないかわりに、村八分にもしないんです。ある意味では無関心の一種でもある。

□食にみた山の手文化

あと、食べ物屋に行った時の注文の仕方が違うと思ったことがあります。僕なんかは食べたい物を食べたい時、その時々々に注文するわけですが、山の手の方はそうではなくて、最初からあれと、あれと、あれというように最初から最後まで注文してしまうんですね。後からはけっして追加しない。最近のファミリーレストランもそういうシステムになっているようで、追加しようとするともう一度、メニューをもらって手続き取らなければならない。そのあたりに違いを感じたりもしてましたね。それからうちでも、僕なんかは出来たものはすぐ食べたいんですよね。出来たてをすぐに食べるのが一番旨いと。しかし、僕の山の手の方はそうじゃない。少し置いて、味がなじんでから（笑）。それから食べるんです。

□山の手への憧れ

僕の出身の墨田川高校で歌われていた歌で、自分は墨田川高校でガールフレンドは女子校の白百合の生徒、将来二人は結婚して生まれた子供が娘だったら白百合に通わせるんだ、と延々と続く歌があったんですよ。白百合は山の手でしたから、やはり山の手に対する憧れのようなものがあってしょうね（笑）。



□実体のない山の手

でも僕等からすると、やはり山の手には実体がないんです。下町については山の手の人たちが実体を作ってくれたから、これが下町なのかという感じがするんですけど、山の手は実体がどこにあるのかよくわからない。山の手といっても具体的に地名をあげろといわれても答えられないし、恵比寿ガーデンプレイスなどが山の手だと言われれば、そうなのかと思ってしまうようなところがあります。映画や小説で考えてみても、明確に山の手をえがいたものは印象が薄く、ある意味で山の手というのは、大衆が思い描く所が山の手になっているのかもしれない。それで具体的な地名があがらない。そういう意味からも、山の手は“街”なのではなくて、そこに住んでいる人のライフスタイルをさしているのかもしれない。勤め人の文化なんでしょうね。下町は食住が常に一緒だから。だとすれば、現代は山の手に似たライフスタイルがどんどん広がっていて、今や僕の住んでいる江東区もそういう風になったということでしょうか（笑）。



本間千枝子氏 ヒアリング

1995年11月14日

本間千枝子：東京生まれ。

三歳の時、実母の兄夫婦の養女となる。

早稲田大学、米国クイーンズカレッジに学び、留学中本間長世氏と知り合い結婚。

著書に『アメリカの食卓』（文芸春秋）〔サントリー学芸賞〕、『父のいる食卓』（文芸春秋）、『愛しきアメリカのバラッド』（徳間書店）、『そして夫と姑が残った』（主婦と生活社）、訳書他多数。

本間千枝子氏は、著書の『父のいる食卓』の中で、次のように書かれている。

今は昔、戦前の昭和、東京には落ち着いた市民の暮らしがあった。（中略）

私はその時代、まさしく東京の中産階級に生まれ、家族の中の一番小さな子供として、都会生活の楽しみ方のパターンについて、さまざまな側面の片鱗に触れさせてもらったように思う。

このたびは、この戦前の山の手生まれ育った本間氏にかつての山の手のリフスタイルから本間氏にとっての山の手、についてお話いただいた。

□山の手の地理的イメージ

山の手というのはどのような地域なのか、地理的なものからその成立については、さまざまな形で研究されていると思うのですが、私がイメージする山の手は、四谷、市ヶ谷、小石川、本郷あたりの、山の手という名の通り高台に位置するところです。かつて私の父が、東京の中でも高台は湿度が低いとっていました。東京の夏は非常に蒸し暑く住みにくいところだが、山の手に来るとほっとすることができるといっていました。

□山の手に暮らす人々

そのあたりに住んでいた人たちというのは、もともと旗本や御家人の伝統である質実剛健や質素儉約という精神風土を引き継いだ、知識層を中心とする中産階級です。宵越しの金は持たないという下町の人たちに対して、山の手は備蓄というものを心がけていた人たちだったのではないのでしょうか。これは、もともと日本の伝統ということもありますが、さらに西洋の中産階級の美德というものへの知識を持ち、それに習っていた側面もあるのではないかと考えます。かつてヨーロッパ系アメリカの人から、戦争などが起こり、物資の流通が一切途絶えてしまっても、3ヵ月間家族が暮らしていけるだけの備蓄をしているのが、中産階級だと聞いたことがあります。すべての補給を絶たれても、3ヵ月というのはすごいことだと思います。1950年代後半ですが、そういうアメリカ人の家庭では、戸棚や地下室に缶詰や砂糖、オイル、小麦粉、紙とあらゆる日常品が備蓄されていました。たしかに、私の家でも、そこまでではなかったにしろ、お米をつねに備え、古いお米から順に食べていました。



□職住の隔離

私が知っている山の手の居住者というのは、元来の住人である旗本や御家人、知識人などを中核にして、昭和の時代でしたから下町とも地方とも行き来のある人たちが多かったと思います。その中には明治政府の役人となって、地方から出てきて山の手に住居を構えた人の子孫もいたり、またいわゆる下町で商売を成功した人が、職住を切り離して住居を山の手に移したという例も多かったですね。つまりそれは、住まいを巷から切り離し、遠ざけたということですが、これは一種の意図せざる隔離だったと思います。もちろん山の手と下町を自由に行き来していたわけですが、私は山の手的生活というものには隔離というイメージがあります。その隔離というのは何であるか。行き来がないという隔離ではなく、各家がそれぞれに自分のライフスタイルを追求している。その家その家のライフスタイルがあり、さまざまな多様性が生まれるようになった、そういう意味での隔離ではなかったかと思います。

□家長文化

山の手の各家庭独自のライフスタイルを決定し、その中心に位置していたのは家長である父親の存在だったと思います。山の手というのは、自分の意思で選択して住んだ地域だったと思うのですが、コミュニティの意識は薄くても、家長の意思というのは一国一城の主に近い、自らの社会的な位置づけを非常に明確に持っていた人たち、わかっていた人たち、それを哲学としていた人たちなのかもしれません。

家長である父親は、妻と子供など家族のすべてを決定的に自分の庇護のもとにしておきました。そこには、地方の親戚の娘や息子などの同居人も含まれていました。同居人とはつまり居候で大学に通ったりしている、いわば山の手予備軍ともいえる人たちや、さらには書生や、ねいやさんと呼ばれるお手伝いさんも含んでいました。またそれだけではなく、自分の妻の兄弟や甥、姪など、全体の庇護もかって出ていました。アメリカでは、たとえばサンクス・ギビングの時にどう

いう人を招くか、そんなとき相手の事情を考えて、あの人は新参だから、ご主人を亡くしたばかりだから家族でいらっしやいとか。それに、本来は自分より経済的には、上の人でも、もう年をとって人を集めて自分のところでパーティーを開くのもたいへんだらうから家にいらっしやいなどと、いろいろな意味で、多方面に渡って人を集めるわけですが、そういう役目をしていたのが、山の手の家長なのではないかと思います。こうした家長たちは、行き交う時には深々とソフトを取って、互いに敬意を払い、尊敬しあっていました。学歴や職業に関わりなく、非常に対等だったと思います。

それから父親としては、教育もしましたが、趣味が非常に豊かで、読書、音楽、囲碁、それから釣りもしていましたし、限られた階層の人ですがゴルフもしていました。妻と連れ立って観劇に行くというようなこともありました。

□「子供」と「西洋文化」

山の手文化の中核としてあげられるのが、子供だと思います。大切にされる子供というが、山の手の特徴ではないでしょうか。そうした子供の教育も父親の役割で、山の手には教育する父親がいたといえます。父親が家にいる時間が今よりずっと長かったですから、家庭教師を雇わずに数学、物理、英語、漢文など子供の勉強をみている父親がいました。もちろん、家庭教師を雇っている家庭もありましたが。母親が教えるのは小学校までで、それ以上になったら絶対に教えなかったですね。

かつて、リリアン・ヘルマンの自伝を訳していて、そこに書いてあったことですが、アメリカの中産階級というものは子供を育てるときに非常に大切にしようです。どのように大切にしようかという、あらゆるものの片鱗にふれさせるということを心がけたといいます。たとえば、アウトドアでどのように暮らすかということであれば、キャンプをしたり、スキーや山登り、ボート、フィッシングなどやらせたようです。語学や稽古事、それに社交になじむことなども多かったといいます。これらは、子供が育っていく上で未知のものに対する恐れ、不慣れ

をあらかじめ取り除いておいてやるという親心だったわけですが、おそらく、山の手の親も同じ気持ちだったのではないのでしょうか。子供があらゆることをちょっと知っていることで、何かよりよい立場に立つことができたり、物事の判断ができることに役立つのではないか、そういうことだろうと思います。

私は、父の方針で、その当時女の子がしなければならなかったお裁縫などはしなくていい。掃除、洗濯、裁縫などは経済的な問題で解決できるからだといわれ、それよりも男と対等に口がきける女になるための準備をするべきだ。ただし、食べることだけは人に任せられないのだから、母の手伝いをして覚えるようにしなさいといわれましたが、これは少々父が間違っていたと思います。経済的に非常に苦しくなったのが戦後の中産階級ですから。

子供の文化環境や教育には、西洋文化の影響がさまざまな所に見受けられます。親が与える音楽や本は西洋のものが多く、子供たちは幼い頃から西洋文化に触れていました。稽古事としてピアノやバレエを習う事も多かったようです。だからといって、その家長が大学出とは限らないんです。ただ、子供たちには一流のものに触れさせたいという親の願いがその頃からあったのでしょうか。自分の子供と人の子供に差をつけるというような考え方ではなく、子供の将来そのものの価値を高めたい、という気持ちだったのではないかと思います。ミッションスクールに入れたり、教養を深めるからといって日曜学校に通う子供も多かったです。宗教に関係なく、キリスト教を危険視しない傾向がありましたね。また、家族で外食するときは、日本料理ではなく洋食。上野の院展など、展覧会を見に行ったりもしました。これなども明治以後の西洋文化の影響というものかもしれませんが、山の手の人たちは非常に新しもの好きであったといえるでしょう。

□精神的ゆとり

時代が変わり、女性が自立できて、自らの意志で進路が確立できるようになったわけですが、当時あって今消えてしまったことが非常に惜しいというのは、やはり精神的ゆとりではないかと思います。当時の山の手の人たちの生活は、その

日その日で完結して生きていたライフスタイルでした。ある意味では個人個人の役割分担が決まっていて、人間関係に継続性のある時代だったと思います。そのような山の手のライフスタイル、山の手の文化そのものの中に、精神的ゆとりがあったのですね。



バークレー・ピアノ・クラブにおける伊藤恵リサイタル

1996年2月9日
午後8時開演

《演奏》伊藤 恵 (ピアノ)

《曲目》 ブ람ス 3つのインテルメッツォ 作品117

ベートーベン ピアノソナタ月光 作品14-2

ショパン 幻想即興曲

シューマン ダヴィット同盟舞曲集 作品6

1995年の夏、ホームコンサート/山の手文化研究会メンバーでもあるピアニストの伊藤恵氏より、1996年の2月、米国カリフォルニア州、ロサンゼルス市においてコンチェルトのソリストとして客演することが決まっているとの報告を当研究会は受けた。そこで、せっかくの良い機会だから、その後に引き続き伊藤恵氏のリサイタルを、アメリカ国内で、ホームコンサートの形で開催する可能性を模索することと決定した。

早速、コンサートの会場として適当な場所探しが始まったが、何分、コンサートピアニストの使用に耐え得るピアノを完備した、便利な立地条件の個人邸宅を探す作業は難航した。そこで、現在サンフランシスコ在住、元・在日米国大使館USインフォメーション・サービス文化担当ディレクターのエドワード・イフシン氏御夫妻に相談して、バークレー・ピアノ・クラブの存在を教えることができた。当クラブは約百年の歴史を誇る、地元の音楽愛好家たちによって運営される由緒正しい、小さなリサイタル・ホールである。賃貸料は、大型冷蔵庫付キッチンの使用料、保険料込みで150ドルとのことだった。同時に、イフシン氏の努力によって、名目上の主催者としてアジア、アメリカ芸術財団の協力を取り付けることに成功した。さらに、イフシン氏の紹介で広報担当をパブリシストのダイアナ・パワーズ氏に依頼。彼女の働きによって、当日までにオークランド・クロニクル、北米タイムズなどにコンサートの関連記事が掲載された。また、イフシン夫妻、当研究会の岩淵潤子、並びに伊藤氏の共通の知人でもあるジェラッシ財団レジデント・アーティスト・プログラムのディレクターで、作曲家のチャールズ・アマーカニアン氏の尽力により、ピアニスト、サラ・ケイヒル氏のFMラジオ番組でコンサートの紹介をしてもらうこともできた。

当日はパブリシティの効果もあり、100名あまりの来場者で立見が出るほどの盛況。現場に居合わせた岩淵は照明を手伝い、休憩時間には人々の協力のもと、アジア・アメリカ芸術財団会長のジェフリー・アダチ氏の挨拶の後、ブラームスで幕を開けたリサイタルは大成功を収めた。その後、関係者六名ほどで近所のレストラン、シェ・パニーズへ行き、アジア・アメリカ芸術財団理事の菅野則雄氏主催の打ち上げディナーが賑やかに行われた。今回のリサイタルは、当初の予定とは異なって、個人宅で行われるというスタイルとは異なったものになってしまったが、関わった各個人の努力の賜であり、貴重な経験となったのはいうまでもない。

新倉邸における犬飼素子&新倉好子ホームコンサート

1996年3月10日

午後2時半

《演奏》 犬飼素子 (ヴァイオリン)
開演 新倉好子 (チェンバロ・ポジティブオルガン)
《曲目》 ヴァイオリンと通奏低音の為のソナタ1番 ヘンデル
クラブサン組曲1番 ルイ・マルシャン
ヴァイオリンと通奏低音の為のソナタ1番 F. ヴェラチーニ
騎士の歌によるディフェレンシャス A. カベソン
グリーンスリーヴス 作者不詳
ファンタジア P. コルネ
フォリア 作者不詳
その他、ルネサンスの小品

研究会では、本年度はこれまで企画してきた演奏楽器以外でのホームコンサートも企画していきたいと考えていたところ、研究会のメンバーでもあり、またフリーのヴァイオリニストでもある犬飼素子氏より、チェンバロ及びポジティブオルガン奏者である新倉好子氏の紹介があった。あまり一般的には知られていないポジティブオルガンや間近で目にする事の少ないチェンバロの演奏ということで、楽器の紹介も含めて是非に、と犬飼氏を通じて早速ホームコンサート開催の依頼をした。会場も自宅に楽器が備えつけられているということから新倉邸の一階居間で行うこととし、プログラムは犬飼氏のヴァイオリンと新倉氏のアンサンブルで計画。新倉邸では、以前にもホームコンサートを行っており、研究会としてはホームコンサートの好事例として見学させていただく形をお願いした。

今回の招待客は新倉邸周辺にお住まいの方を中心に約24、5名程を予定。案内用にはB5版のチラシを作り、新倉氏および犬飼氏より配布していただいた。できればコンサートの後、ゆっくりと話をしながら寛げるようにしたいということから、歓談の時間は演奏終了後に設け、簡単な軽食と飲み物を準備することになった。また当日、会場内の椅子を並べたり、花を飾ったりといった準備も新倉氏やお身内の方にお任せした。コンサートのはじめに新倉氏と研究会側から岩淵氏が挨拶を行い、ホームコンサート開催の経緯や主旨を説明。また演奏に入る前に新倉氏より簡単な楽器の説明がさ

れた。特にポジティブオルガンについては演奏終了後、楽器の仕組みがよくわかるようにと一部分を開け内部まで見せていただき、集まった人々も興味深く見ていた。歓談の途中には、参加者の中から二人で笙の即興演奏をする場面もあり、まさにホームコンサートならではの終始和やかな会となった。



〔コンサート風景〕



〔新倉氏・挨拶〕



〔ポジティブオルガン〕



〔歓談風景〕



〔笙の即興演奏〕

山の手文化研究会 95年度 研究報告書

研究会 座長 岩渕 潤子

メンバー 伊藤 恵

犬飼 素子

岩野 裕一

鈴木 伸子

松岡 温彦

水野 統夫

米村 洋一

(五十音順)